

「人理修復したし、
ちよつと童貞捨ててく
る」「えっ」

KEY (ドM)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんにちはんこそば。

KEY (ドM) と申します。

あらすじ

FGOの世界に転生して、

俺、オワタ、な状況から

逆転満塁ホームランで世界を

救ったから童貞捨てるわ、なお話。

それでは、ご覧ください (KBTTT)

KEY
(
F
M
)

目次

ちよつと童貞捨てたいんだけどどうしたらしい？	1	た件	45
分岐ルート	D (○○○○○○)	分岐ルート	D (○○○○○○)
度ごまかしてから発覚した場合	ハッ	度ごまかしてから発覚した場合	修羅場
ピーエンドやな (震え声)	16	in 食卓	↳ 抜け駆けしたもん勝ち
分岐ルート	D (○○○○○○)	分岐ルート	D (○○○○○○)
度ごまかしてから発覚した場合	ア	度ごまかしてから発覚した場合	風呂場
ア・・・オワツタ・・ (かすれ声)	32	でダブル・乳上!	71
分岐ルート	D (○○○○○○)	分岐ルート	D (○○○○○○)
度ごまかしてから発覚した場合	後輩が	度ごまかしてから発覚した場合	人・類・
ドSあまあま母性マックス系になつてい		悪・けん・・・あれ? なんやこのかわいい	
		生き物・・・ (困惑)	84
		分岐ルート	H (○○○○)
			↳ 童貞を

こじらせにこじらせていた場合くあーも
うめちやくちやだよ（棒読み）く

97

童貞を捨てた後く逆に考えるんだ。上書
きして、自分のモノだつてマーキングし
まくればいい、と（震え声） その1く

110

サマーヒート・デッドレース!!イシユタ
ル・カップⅡ!!くあれ?優勝賞品おかし
くね?（震え声） くその1

123

サマーヒート・デッドレース!!イシユタ
ル・カップⅡ!!く気が付いたら逆レイプ
されていた件くその2

135

サマーヒート・デッドレース!!イシユタ
ル・カップⅡ!!くスクール水着黒ニーソ
の立香とエロエロとくその3

146

サマーヒート・デッドレース!!イシユタ
ル・カップⅡ!!く暴走!!妄想!!追走シユ
ラバンバ!!くその4

159

サマーヒート・デッドレース!!イシユタ
ル・カップⅡ!!く墜ちろ!!く……落ち
たな（確信） くその5

167

【幕間】 くもし、女性サーヴァント特攻の
ニコポ、ナデポ持ち転生者がやってきた
らく

177

【幕間】 くもし、女性サーヴァント特攻の

ニコポ、ナデポ持ち転生者がやってきた
らく後日談くこれから本当の修羅場だ

(震え声) く
188

メリー苦しみます(白目)くプレゼントは

お前だくその1
198

メリー苦しみます(白目)くプレゼントは

俺だった・・・?くその2
208

パンツ見せてくれて頼めば、童貞捨て

られるらしい(錯乱) くふぁーすとく

220

パンツ見せてくれて頼めば、童貞捨て

られるらしい(錯乱) くせかんどく

227

パンツ見せてくれて頼めば、童貞捨て
られるらしい(錯乱) くさーどく

234

ちょっと童貞捨てたいんだけどどうしたらいい？

「童貞捨てたいんだけど。」

「うん……うん……うん？」

俺の言葉を聞き流そうとして、

二度見し、今お前なんつった？といった

感じで俺の顔を見てくるランサーに

クー・フリーン。

あほか？と言わんばかりの

視線に対して抗議の声をあげたいところだが、

今はそれを抑えて彼に対して

もう一度自身の願望を述べることにする。

「童貞す」

「二度も言うな！……で、なんでだ？坊主。」

他の女性サーヴァント達が入ってこられない

部屋で複数の男性サーヴァント達に囲まれながら

ベッドに座って意を決して言う。

「——すっげえムラムラする。」

「さて、今日のおかずでも取ってきてくるか。」

「解散ー。」

無情にもドアの方向に向かい、帰ろうとする

ロビンやエミヤン達の脚にしがみつき、

必死に懇願してこの場に押しとどめる。

「おねげえしますだあ!!オラ、2x歳の

アラサー手前だけでも未だに童貞ん

なんよお!!色男なチミたちなら童貞の

捨て方くらいわかるだろう!？」

「やめろっ!!軟体動物みたいに

しがみつくなっ!!」

「……こんなこと頼んでくる

マスターとか初めて会ったわ……。」

エミヤに怒鳴られ、ロビンからは

呆れ声でそういわれるがこちらとしては
それどころではない。

彼らみたいなイケメンにはわからないだろうが
俺は不細工なのである。

もう一度言おうと、転生したというのに
前世での容姿が引き継がれているという
人生ベリーハードモードなのである。

「大体、なんでそんなことを
言い始めたんだ？」

クー・フリーンがわからない、といった
感じで首を傾げ、俺に聞いてきたので
ぼそぼそと小声でその理由をつぶやく。

「……女性サーヴァント達の格好が……」
「あつ……」

エミヤン達も察したのか俺に
哀れみの目を向けながら手で

口元を抑えて、ご愁傷さまとつぶやく。

「なんだよあれっ?!?こちらとちら

未だ女性経験ZEROのスーパーD.Tだぞ!?

下着姿でうろつている奴とか!!水着姿とか!!

こつちを誘っているようにしか見えないんだよオラアツ!!」

両手で股間を抑えながら内またでぶるぶると

震え、このカルデアに来てから召喚で呼び出した

女性サーヴァント達の格好を想像する。

本当に、AV女優顔負けのあの格好で

偉人とか無理があるわ。

性的な意味での偉大さだったら

納得できるけども。

はあー、と心底どうでもよさそうな

感じのため息をついて、エミヤんが

真顔で俺の肩に両手を置いて忠告してくる。

「……女性に夢を見過ぎるのは

やめておけ。理想を抱いて溺死するぞ……。」

疲れ切った表情でそういう彼からの

心優しいそんな忠告も今の俺にとっては

モテる男であるからこそ言える余裕ありきの

態度としか感じられず、思わずむっとなる。

前世の日本で就職氷河期世代の最悪の

人生を歩んで、こちらでもなんとか生き抜いて

きたというのに、結局これか。

あれか。金か。顔か。中身か。

それらすべてを持っていないと恋愛は

だめなのか。女子とエロイことはできないという

のか。

——— だったら最終手段だ。

カルデアの査問会とやらが来るまで

あと何日かはある。

すつとベッドの上から立ち上がり、

出口の方に歩く俺の背中にエミヤン

からの声がかけられる。

「・・・・・・・・どこに行くのかね？」

ほぼ、自暴自棄でヤケクソ気味になっていた俺はエミヤンの方を振り返って小指を立てて宣言する。

「——ちよつと童貞捨ててくる。」

「ふむ。なるほど。・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・
 ・・・・・・・・・・・・・・・・
 ・・・・・・・・・・・・・・・・
 ・・・・・・・・・・・・・・・・

俺の返答に何やらフリーズしているが、そんなことは今は些細なことである。

俺をじつと見つめてくるダヴィンチちゃん。

「——査問会が来るまで、まだいくばくかの猶予はあるけど……。けど、どうして?」

「……それは、その……。」

風俗行つてきます、なんて思わず口を

すべらしそうになり、慌てて唇を噛んで

言葉を飲み込み、精一杯の笑顔で演技する。

「か、家族に会いに行きたいなーって……。」

「……。」

バレたか……??

そう思つて身体をがちがちに硬くしながら

棒立ちで立っていると、彼女が懐から

何かを取り出し、すつと差し出してくる。

「……これは?」

「……飛行型ばすてにゃん—EXとらとら号の

鍵、さ。」

「!!」

「私が開発したあれなら、すぐに君の

故郷まで行けるだろう。」

「ダ、ダヴィンチちゃああああああんっ!!」

思わず涙をうつすらと流しながら

彼女を強くハグハグする。

なんて優しい人だ!!と感動していると、

一緒に「レフでもわかる説明書」と

書かれたファイルを手渡される。

「3日。それまでに帰ってくるよ。．．．いいね?」

「はいっ!!」

彼女の両手をつちり握り、上下に

ぶんぶんと振り回して、力強く返事をし、

部屋のドアに向かう。

計画通り．．．っ!!

このムラムラを抑えるために、
何としても童貞を捨ててこなければっ・・・!!

「全く。・・・めった刺しにされるだろうけど、
それは、それ。——自己責任だよね。」

彼女のつぶやきは俺には聞えることはなかった。



「せんぱーい。」

眼鏡をかけた小柄な桃髪の

少女がとある部屋の呼び出しボタンを押しながら声をかける。

マシユ・キリエライトという少女は、自身が敬愛している人物と一緒に時間を過ごすために彼の部屋までやってきたのだった。

いつもなら、部屋で本を読むか、カルデア内を散歩して、他のサーヴァント達と談笑にふけるところだが、その日はいつもとは違っていた。

「……あれ？」

しかし、いくら呼び鈴を押して、目的の人物の名を呼んでみれど、返事はなく、静寂のみがかえってくることに彼女は首をこてんと傾げて疑問を抱く。

『おい!!どうすんだよ!!』

マジで外出しちまったみたいだぞ!!?』

「……声?」

耳をマスターの部屋のドアに当ててみると、何やら中から声が聴こえてきた。

しかし、それは彼女が探している

人物の声ではなく、別の男性の

ものであった。

『どうするんだ?このこと、

ばらすわけにも……』

『当たり前だつ!!……こんなことが

他の女性サーヴァント達に知られれば

一大事だぞ!!……最悪、カルデアが

消し飛びかねん……!』

(……一体なんの話をしているのだろう。)

気にはなるが、隠れ聴きはよくない。

善性の気質な彼女がそう思って
立ち去ろうとすると、それは彼女の
耳に聴こえてきた。

『——しかし、童貞を捨ててに行くなど、
マスターはそこまで悩んでいたのか。』

——気が付いたら、彼女は扉を
殴って破り、中に侵入していた。
もはや、サーヴァントの力を
内包していないはずの彼女がそんな
人間離れたことをできたのは
謎である。

目を見開いて、お互いに話し合っていた
エミヤたちはマシユの尋常ならざる
姿を見てしまい、やや飲まれながらも

挨拶した。

「や、やあ……」

どうしたのかね……」

「……」

いつもどこか余裕を含んでいたエミヤの皮肉笑いもこの時ばかりは全く役にたたず、ただガチガチと歯を震わせて、後ろに後ずさっていた。

「さっきの話。教えてください。」

本気で怒った女性は何より怖い。

その日、そこに居合わせてしまった

男性サーヴァントたちは後日、

15 ちょっと童貞捨てたいんだけどどうしたらいい？

そう語ったという。

分岐ルート D(○○○○○○○) へ一度ごまかしてか
ら発覚した場合へハッピーエンドやな(震え声)

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「

拜啓。おかあ様。

人理を修復し、あなたもこの世に

蘇って、いつものように過ごしておられると

思います。

私は今、カルデアという人理保機関にて働いており、世界を救ったばかりです。前世では40を越えても独身だったため両親をガチ泣きさせてしまい、今回の人生では恋人なるものを所望している次第であります。

——早速ですが、職場の雰囲気最悪です。誰か、誰か助けてください——。

風俗に行こうとしたことが職場に人たちにバレました。



呑気な顔してダヴィンチちゃんからもらった鍵を手でもてあそび、廊下をスキップで

駆ける男が一人。

白紙にされてしまった人理を修復し、世界を救った人物である、増田課金である。ちなみに、名前の由来は昨今の世の中で社会問題となつているソシャゲに対してあまり課金しすぎないように、との両親の願いが込められている。

彼は無邪気な笑みで、これからの自分が歩みだすバラ色の未来に向けてその足を動かし、歩み続けていた。

(やっべえ。俺の時代来た？来ちゃった？)

童貞を綺麗な女の子に捧げて完全勝利？

UC流す？流れちやう？)

走っているからか、女性とのエロ行為を妄想して興奮しているからか彼の心臓はこれ以上ないほど高鳴りしており、

ハートは熱く燃え滾っていた。
溢れる性欲のリビドーに突き動かされ、
彼が廊下を進み続けているとある
人物とすれ違う。

「あ。先輩。」

「おや。マスター。」

「あー。マスターじゃないですかー。」

マシユキリエライト、リリーのアルトリア、

そして沖田が前の方から歩いてきて

鉢合わせになる。

若干、ハイになっている増田は

いつもなら挙動不審気味になるところを

堂々と声をかけて挨拶する。

「うおーっす！元気か？元気だな？

ははははははっ！」

「・・・先輩が壊れた。」

「マスター。特異点を巡る旅で

疲れてしまったんですね・・・。」

「おいたわしや・・・。」

悲痛な声で彼の身を案じる声も、

今の増田には寝耳にウオーターであり、

右から左へと流されていった。

そんないつもとは違う様子の彼に

どうしたのかと身を案じて

尋ねる3人。

「先輩、随分機嫌が良さそうですけど、

どうしたんですか？」

「ん？それか？それは——。」

そこで、初めて増田は今、自分が

置かれている状況を自覚した。

冷静になった彼の首元から

汗がたらりと流れ、手が少し

震えだし、体が強張り始めた。

——俺、今から風俗行って、
童貞捨ててくるんだ——。

そう滑りかけた口を何とか済んでの
所で抑え込み、苦笑いをしつつ、
ダヴィンチちゃんにも言った嘘を
彼女たちにもたまう。

「・・・あ。あああれだ!!ほ、ほら!!

実家に帰省するんだよ!!」

「へー。先輩のご実家ですか。」

「そういえばマスターは日本出身でしたね。」

「沖田さんと一緒ですね!!」

「う、うんうん。一緒でうれしいナー。」

「やだー♡マスターったらもー♡」

はははは、と場が和み、さて

別れて俺は外に出ようとすると、

肩をがっちりと彼女たちに掴まれる。

「……どうした？」

「先輩。そろそろご両親に挨拶に

伺いたいな、なんて……。」

「恥ずかしくない格好をしないと、ですね。」

「沖田さん、和服しか持つてないんですよねー。

……洋服着ようかなあ。」

「……え？」

一体彼女たちが何をいつているのか

わからず、俺は素でそんな声を出して呆ける。

——え？ついてくる気？

だが、それはいくらなんでもまずい。

今はノリでなんとか会話できているが、

この興奮も収まれば結局、彼女たちと

話すときにもってしまう。

何よりも、ムラムラした状態で
女子と一緒に行動とか精神的に
死ねる未来しか見えないので、必死に
言い訳を述べる。

「あ、ほら。俺、自分の分の

パスポートしか持っていないし・・・。」

「ダヴィンチちゃんが私たち全員分の

パスポートを用意してくださいましたよ？」

「へ、へー・・・。そうなのか・・・。」

ダヴィンチちゃああああああんっ!?

何を余計な事してくれちゃってるのおおお!?

心の中で叫び声をあげここにはいない

中身男な美女に対して怨嗟の雄たけびを

漏らして慟哭する。

（・・・だ、ダメだ。）

断る大義名分が思いつかない。

このままでは俺がムラムラした状態で

彼女達美少女組と一緒に行動を余儀なくされるという

悪夢が手ぐすねを引いて待つこととなってしまう。

——かくなる上は。

「あ!!あんなところに野生のヒロインXがつ!!!」

「!!!!」

俺が指さした方向を振り返り、

身体をびくつかせる彼女達。

セイバーである二人と、その2人に

挟まれ、同調行動をとってしまったのか

マシユも振り返っているすきにダッシユでその場から逃げ出す。

「あ!!?先輩!!?」

「ちよっ……!どこに行くのです!?!」

「マスター!?! 結納は!?!」

遠ざかっていく彼女たちの声を

聴きながら俺はボル○も驚きの俊敏さを
発揮し、ぐんぐんと彼女たちから離れる。

(性欲を持って余すっ．．．!)

オナホで自己処理する日々はもう

嫌なんじゃ、と心の中で泣きながら

明日への撤退をするのだった。



「行つてしまいました．．．。どうしたんでしょう?」

「さあ?」

「も、もしや沖田さんの事が嫌いに．．．？」

残された3人は呆然とその場に立ち尽くし、先ほど自分のマスターがとつた奇行に対して推測を立てる。

だが、まさか件の人物がただ

性欲を解消し、童貞を捨てるためだけに

こつそり見栄を張ってカルデアから

外出しようなんてことを知る由もなかった。

とりあえず、マスターの事を追おう。

実家に挨拶する件に関してまだ、

話が終わっていないし。

そう思つて歩みを進めようとする

彼女たちの後ろからとある人物が

ダツシユで走つて彼女たちを追い越した。

と思つたら、彼女たちに気が付いた赤い服を身にまとつている白髪褐色の人物が

3人に必死の形相で声をかけた。

「おお！君たちか！」

いつも余裕があるはずのエミヤが

そこまで取り乱している姿を初めて見た

彼女たちは顔を合わせ、マシユが尋ねる。

「あの．．．。どうしたのですか？」

「マスターを見なかったかね?!」

鬼気迫るその様相に若干引きながらも

マシユは指で増田が走り去った方角を

指し示し告げる。

「マスターなら、さつきものすごい剣幕で

走って行っちゃって．．．。」

「ありがとう!!．．．．．マスターああああ!!

考えなおせえええええ!!君は死ぬ気かアアア!!」

叫びながら走って行くエミヤの

後姿を見て、一体何事だ？

とマシユたちは身をすくめていると、
後ろの方からまた、別の男性サーヴァントたちが
やってきた。

「はあっ……。全く、あいつは必死だなー。」

「……無理もねえか。」

「バレたら全面戦争だもんなあ。……とおっと。」

彼女たちの姿に気が付いたロビンが

自分の口を右手でふさぐ仕草をし、

背中を向けて他のサーヴァント達と

ここそそと内緒話をし始めた。

『おい。ばれたらやばくね?』

『せ、拙者はハーレム好きですが

重たい女はノーセンキューですぞ!!』

『……俺も、妻のことですの

気持ちにはよくわかるぞ……。

グルンヒルド……。」

『どうする?』

『すまない……。マスターを

止められず……。すまない……。』

『あははは!!マスターすつごい

たのしそー!!僕も全裸で追いかけたーい!!』

『とにかく隠すしかないでしょうなあ。

……。ううむ。それにしても女性関係で

そこまでマスターが悩んでおられたとは

このハサン、気づけませんでした……。』

『いや、気が付いたら逆にすげえよ……。』

『何を話しているのですか?』

『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』

それまでバラバラに、思い思いの事を話していた

サーヴァント達がマシユの言葉に対して

一斉に同じことをシンクロして言う。

とりあえず、俺たちが口を割らなければ

大丈夫。世界を救ったというのに、カルデア内部で

最終戦争が起きて、終末が訪れたらとんでもない。

だから、絶対に隠し通そう。

そう思っていた矢先、この場で最も空気を読まない

男がにやにやと笑いながら愉悦のために全てぶちまけた。

「——ああ。あの男なら商売女を

抱きに外の世界に行ったぞ。」

——ぴしり、とカルデアの窓ガラスにひびが入った。

(やばい………。さっきのマシユたちの甘い匂いで

ちよつと硬くなっている……。は、はやく

行かねば……。)

ちん○を勃たせながら男として
一皮むけるために、増田は若干前かがみで
走り続けるのだった。

分岐ルート D(○○○○○○○) ～一度ごまかしてから発覚した場合くアア・・オワツタ・・(かすれ声)

吾輩は童貞である。

もう一度言う。

吾輩は童貞である。(CV・子安)

それがなんだというやつもいるであろうが、

これは思っている以上に苦痛なのである。

想像してみるがいい。

高校の知り合いばかりに彼女ができて、

自分だけ彼女ができず、延々とネタにされる

あの何とも言えない絶望感を。

就学旅行の時なんて、皆は女子の部屋に

遊びに行っていたというのに、俺は一人、

自室で持ってきたエロ本を一人悲しく

読んでいたのである。

浪人生活という、性欲が一番昂る時期に

勉強だけに集中させられる悪夢のような時間を過ごし、
やっとの思いで中の上程度の大学に入り、

さあ、と活きこんでサークルに入った俺を

待っていたのはさらなる絶望だった。

——ファクションがダサすぎた。

一年間、社会から隔絶され、世間離れしてしまった

俺は見事に大学デビューに失敗し、晴れて、

孤立無援の童貞ぼっちとなり果てた。

家と大学を行き来する生活には

恋愛イベントどころか、友情的サムシングも

一切存在してはおらず、吐き気さえ感じたほどである。

何がいけなかったのか。

ただただ、俺自身の存在が悪かったのか。

そうして、見栄を張って大学に入り、

さあ、就職だ。今度こそ可愛いこと付き合えるように

仕事に打ち込むぞ、とヤル気マックスなところに

最後のとどめを刺される。

——バブル崩壊である。

正社員の登用率は50%程度となり、就職氷河期世代として、この景気に人生を壊された俺には派遣社員の道しか

残されておらず、フリーター以下の収入で食い扶持をつなぐことで背一杯だった。

かつての同級生と会えば、なぜか皆正社員に就職できており、家庭を持っている奴もおり、そうしてまた、

俺は1人取り残された。

ギリギリの生活を10年ほど送り、そろそろ婚活なるものに出そうとしたところ、結婚相談所では、相談相手のお姉さんに出した履歴書を見られた瞬間。

——はっ、と軽く鼻で嗤われた。

もしかしたら、それは俺の記憶違いで彼女は

本当は笑ってなど折らず、単なる愛想笑いをしていて

くれていただけなのかもしれない。

けれども、そこで何かがこと切れた俺は、
履歴書を奪い取り、くしゃくしゃに丸め、
机の上に捨てて相談所を去った。

2000年代に入り、結婚の価値が下がったときに比べると、
その時は『結婚していない人間はどこか欠陥がある』と思われていた
ほどであり、親戚や、家族からもよくいつ結婚するの？と言われるたび、
そんな相手いるわけないだろ、と内心思いながらも苦笑いを返したものである。
とうとう、一回も正社員として働けないまま20年が過ぎ、

四畳半のボロアパートで遊びに行くお金もないからゴロゴロしていると、
俺のケータイに突如、着信が入った。
そして、手に取って通話ボタンを押した俺に
さらなる悪報が舞い込んだ。

通話相手だった、親せきのおじさんの声は、
かすかにこらえきれず、震えていた。

『……いいか。よく落ち着いて聴いてほしい。

——ご両親が亡くなられた。』

持っていたケータイを床にごとり、と落し、

放心したまま立ち尽くした。



「……ふわっ!?!」

奇声をあげて、起きてみればそこはまごうことなき

都会であった。そういえば、ばすてにゃんEX号で空を飛び、

不法入、日本にお邪魔してからネカフエに泊り、

情報収集していたところまで覚えていた。

色々疲れていたのか、寝落ちしてしまっていたらしい。

忌々しい前世の事は置いておいて、パソコンの

キーボードをカタカタと打ち込み、『風俗 安全 高級』と

キーワードを入れて、グーグ●で検索する。

ヒット件数が多かったので、一番上の方を見てみると、

どうやら、そっち系のお店のホームページらしい。

いくつかそのお店について調べたところ、

悪いうわさもなく、暴力団と関係も持っていないいらしかった。

——行けるか？

ちらり、と横目でパソコンの時間を見る。

時刻は、21:09と書かれており、まだ電車は

動いている時間帯だった。

(・・・・朝青●みたいな女が出てくるのは

御免だからな・・・)

安いところもあつたが、えてしてそういうところは

安かろう、悪かろうな気がしたので、やめておき、

多少値が張つても、いい経験をして、童貞を捨てたい

気持ちがあつた。

大丈夫大丈夫。俺は人理修復を全し、世界を救つた

カルデアのマスターだ。

童貞を捨てるというミツシヨンなど、それに比べれば

大したことはない。

という思考の末にやってきたのは、

新宿のちよつと高めの風俗店だった。

客引きの数も半端なかったが、それらの

攻撃をかわし、今、俺は店の前に立っている。

心臓の鼓動が、いつもより早くなっている気がする。

呼吸が苦しい。緊張しているのか。

手と足が硬く、体がそわそわと落ち着かない。

(・・・行くぞっ!!!)

——意を決してドアを潜り抜け、中に入った。

「先輩。いらっしやいませ。」

「

——真顔で俺のことを見つめているマシユと、
女性サーヴァントの皆がそこに立っていた。



「……………」

□ □ □ □

やはりこうなったか、とダヴィンチちゃんは

軀となり果てた男性サーヴァント達の倒れ伏す姿を見て、

ふう、とはかなげに息を吐いた。

天才だからね。

こうなることがわかっていたのも仕方ないね、と

自己完結しながら、彼女は倒れている男性サーヴァントの

上にお尻を乗つけ、よっこらせ、と座り込む。

持参したお茶をずずず、と飲みながら

彼を追って、日本へと追いかけていった女性サーヴァント達は
今頃、彼が入ろうとしたお店を先回りして占領し、『童貞を
捨てたい』という彼の望みを思う存分叶えていることだろう。

こつそりと彼の衣服につけた盗聴器のスイッチをオンにすると、
激しく抵抗する音や、叫び声が機械のから彼女の耳に聴こえてくる。

『ま、待てよっ!!俺はなっ!!ちゃんと自分の性欲を

発散して性処理するために、その手のプロに頼みに来ただけだ!!

もしも、といったことを起こしたらまずいと思つて

ふうぞ……、お、女の子とにやんにやんでできるお店に来ただけだっ!!』

何かものすごく苦しい言い訳がダヴィンチちゃんの耳に

届いた気もするが、彼女はそれさえも涼しい顔をして

受け流し、優雅に事の成り行きを見守っていた。

「……ダ、ダヴィンチ女史……」

「……おや。生きていたのかい？」

彼女に話しかける声が一つ。

のそのそ、と芋虫が這いずり回るように力のない動きで
転がりながらその人物は死体の山から出てくる。

「か、彼は無事かね．．．？」

「．．．君って、なんだかんだ言ってマスター思いだよねえ。

．．．ご覧の通りさ。」

耳につけていたイヤホンを外し、外部スピーカーに切り替えると、
修練場に音が鳴り響く。

『待て待て待て待てっ!!悪かったって!!確かに女子からしたら

こういうもののにのめり込む男は嫌だろうさ!!気持ち悪いだろうさ!!

けどな!!俺は決してお前たちをネタにして、そうした

やましいことをしたことはない!!こっそり自宅から持ってきた

エロ本でいっつも自家発電してたからノーカンだろ!!?

．．．な、何でさらに怒ってんだ!!?

「馬鹿だな．．．。」

「馬鹿だね。」

ダヴィンチちゃんからお茶を受け取ったエミヤは、ボロボロの格好のままずっと、と無常さを感じながら詫び鏝を堪能する。

『こ、こうなれば令呪で……!!……全然効かねええええ!!』

対魔力持ちばつかじゃねえかアアア!!』

「令呪を使ったって、今の彼女たちを止められるわけないだろうに。」

「……………」

『……へ?な、なんでみんな脱いでいるんだ?』

え?え?え?ちよ、近——』

「ま、めでたしめでたしってところだね。」

「……査問会が来るまでにちゃんと帰ってくれば

いいのだが……。」

「問題ないよ。……以前、ちゃんと”彼女達”に

3日までに帰ってくるように、って言っているから。」

「・・・その3日まで、あと1か月くらいあるのは、

俺の気のせいかな？」

『
!!!
!!!!!!
!!!?
!!!』

ぶつつ、という音が鳴ったかと思うと、

あとはざああ、というノイズだけがスピーカーから響き渡る。

「

「ますたー。やつ、れた？」

「ぐふふふwwwwリア充爆発するがいいですよ！」

「・・・すまない。彼女たちを止められずにすまない・・・。」

「フハハハハハ!! 見ろ!! 太陽の!! あの雑種めの顔と来たら・・・!!」

「ふはははははは!! 女を知り、男になったか!! マスターよ!!」

カルデアに帰ってきた彼は、色々な意味で

一皮むけたという。

なお、一線を越えた女性サーヴァント達による、『正妻戦争』なるものが勃発し、賞品となった

彼が、またひどい目に合うのは別の話。

分岐ルート D (○○○○○○○) ～一度ごまかしてか
ら発覚した場合～後輩がドSあまあま母性マックス系に
なっていた件～

「」

「干物かな？」

「そうだよ。」

からっからにやつれ、時折痙攣しながら

あー、うー、とうなり、ぶるぶると身体を

震わせる男。増田。

やったぜ、やつちまったぜ、という視線を

周りにいる男性サーヴァント達から向けられ、

近くにいた者たちがひそひそと内緒話をする。

『・・・あれ、生きてんのか？』

『大丈夫じゃないの？時折痙攣しているみたいだしさ。』

『はっはっは!!うむ!!圧政に抵抗した結果だな!!』

『うむ!!輝いているな!!そう!!この私みたいに!!』

『さすがです!!我が主よ!!』

ドリフ顔負けのカオス・オブ・カオスと化した
カルデアの食堂。

修羅と化した女性サーヴァント達を止め、

マスターを守るために粉骨碎身した

男性サーヴァント達は後日、彼が

かえって来るまで医療室で寝込んでいた。

室内と思えないほど荒れ果て、まるで

どこかの心がガラスな男の固有結界みたいに

荒涼としてしまったカルデアの修復にあたったダヴィンチちゃん

『はっはっは!!こうなることは予想していたよ!!なんとたつて私は

天才だからね!!・・・ばすてにゃんEXを巻き込んだのは絶対に

許さない。』

笑いながら怒るといふ器用なことをしつつも、

結局後始末をするあたり、彼女も増田のことを

大切にしていることが伺える。

動く気配のない増田に、さすがのサーヴァント達も
声をかけ、身の安否を確認しようとする。

そう、ただそれだけだったのだが――。

「先輩？」

「!？」

いつの間にか増田の後ろに回り、両肩に手を置いて

耳元でささやくマシユの姿があつた。

ざわ．．．ざわ．．．とあたりがざわめきだし、

『一体何が始まるんです?』、『これからが本当の地獄だ．．．!』と

サーヴァント達は事の成り行きを見守る。

「もう、一緒にご飯食べないか部屋まで誘いに行きましたのに。」

「あ．．．あ．．．。」

頬をぷつくりと膨らませ、ぷりぷりと怒る

健気系後輩の姿に「あ．．．かわいい．．．」と

和む男たちが続出する。

傍から見れば、ただ先輩を心配している優しい後輩にしか彼女は見えなかった。

しかし、増田は彼女が現れてからその

震えるスピードをさらに早め、かちかちと

歯をすりあわせるほどに動揺していた。

「……今日は私の番ですよね？」

「……や、やめてくれ……。」

彼だけに聞こえたそのささやきに、

身体を揺らしながら拒絶する増田。

まだうまく体を動かせないのか、ゆっくりと歩いて、

だが、逃げたいという意思がこもった歩みは

あっさりと彼女たちに止められる。

「あー!!マスター!!ここだったんですかー!!

沖田さん、カルデア中を探し回っていたんですよー!!

「……。」

いつも通り、元気はつらつであり、口の端から血が
ちよつと垂れながらも飼い主に甘えるように沖田が
増田の腕に自分の腕を絡め、立ち上がらせる。
その反対側をどこかもじもじと体をくねらせ、
頬をほんのりと赤く染めたセイバー・リリイが
腕を絡めて無言で連行していく。

「俺が悪かった・・・!!悪かったからもう・・・!!」

「駄目です。——『おくすり』はナイチンゲールさんに

つくってもらってまだまだありますからせつせと

『うんどう』しましょうね♡」

「あははは!——マスター、沖田さん、まだ

激おこですからね?・・・5回は出してもらわないと・・・。」

「・・・い、行きましょう・・・。」

「あああああ・・・!!!」

首をぶんぶん振りつつも、サーヴァントの力にかなうわけもなく、

宇宙人にキヤトルミューテイレーションされる牛のごとく、いずこかへと男は憐れ、連行されていく。

——事の経緯は、彼が風俗に童貞を捨ててに行こうとしたところまで遡る。



「……う……。」

重たい頭、体中に響く筋肉痛。

これまでにないバッドコンディションで目を覚まし、ぱちり、と目を開けた彼は身体を起き上がらせる。

どこかのマンションの一室なのか、やけに

広いその部屋は、カルデアでは見かけない

構造であった。それが彼に今、自分がどんな

状況であるかを悟らせた。

(……カルデアじゃない? ……俺……は……)

そこまで考えだし、そして思い出した。

——彼は、思い出してしまった。

風俗に童貞を捨てに来たら女性サーヴァント達が

先回りしていて、彼女たちに衣服をはぎとられ・・・。

(・・・うう・・・)

その先を思い出そうとすると、ずきり、と

彼の頭が酷く痛み、思わず手で頭を抑える。

防衛本能が『それ以上いけない』、とでも言わんばかりに

ガードしていることを彼は知る由もなかった。

店の前まで来ていたことは覚えているものの、その先を

どうも思い出せない彼は、そんな自身の状況を思い出しつつも、

寝ていたベッドから身を起こし、起き上がろうとするのだった。

「・・・あたまが・・・。・・・ん？」

そこでようやく増田は気が付いた。

自身の格好に。生まれたままの姿であることに。

普段、寝るときはちゃんと服を着て寝ている彼にとって、それはありえない状態であった。

(
・・・・?・・・・?
????
)

当然、その頭の中を幾多もの疑問符が埋め尽くす。え?え?と困惑していると、部屋についていた扉がちやりと開き中に誰かが入ってくる。

「あ。先輩、もう起きられましたか?」

「・・・マ、マシユ?」

そこにいたのは、サーヴァント状態の服に身を包んだマシユだった。

もう戦うことはないはずの彼女がどうしてそんな恰好をしているのか。

いや、なぜそんな落ち着いていられるのか。

もろもろの思考はたった一つの問題に

向けられる。

——そう、彼は裸だった。

「……!!!」

あ、やばい、と増田は咄嗟にシートにくるまり、自分の身を隠して、マシユに見られないようにした。セクハラとか訴えられるヤバイ、と思考が斜め上に行っていた彼だったが、彼女はそれ以上にぶっ飛んでいた。

「しつれいします。」

「!!?」

あろうことか、シートの中に入ってきて、背中から彼に抱き着き始めた。

鎧越してもわかる体の柔らかさが彼にも伝わり、思わず頓狂な声を増田はあげた。

「ママママママシユっ?!」

「……ふふ……♡先輩♡」

「……うっ?!」

更に信じがたいことが彼の身に降り注いだ。

——マシユが、彼の朝勃ちして硬くなっていた

性器に右手を忍ばせ、そつと優しくつかんだのである。

一体これはどういうことなのか？

夢？ マーリンに悪戯でもされているのか。

増田はぐるぐると目を回し、はあ、はあ、と

息を荒くしながら興奮しているマシユに右手で手コキされる。

「ふふふ……先輩ったら♡まだ日も高いのに

こんなに大きくしちやつて……♡」

「あ……うぐ……！」

自分でするのははけた違いの興奮度。

他の女の子からそうしたことをされた経験がない

彼にとってそれはあたり前と言える出来事だったが、

当の本人は余裕もなく、彼女に手でもてあそばれる。

「じゃあ♡今から10秒数えるから、それまで

耐えてくださいね？♡……出しちゃったら

「おしおきですよ・・・?♡」

「マ、マシユ・・・!やめっ・・・!」

「いーち♡」

「!!うぐあああああつ!!」

それまでは指で亀頭の先つぽを優しく撫でるように

上下に擦っていた彼女の手つきが変わり、根元を

しつかり握りしめ、ずりゆずりゆ、と容赦なく

手で絞り上げていく。

「にーい♡」

「あ・・・ああ・・・。」

シーツに顔をうずめなが彼は混乱した頭で考える。

なぜ?どうしてマシユにペニスをしごかれていいのか?

その答えが動揺した頭で出るわけもなく、ただ無常

彼女になぶられていく。

「さーん♡しーい♡い♡い♡お♡」

「・・・う・・・ひぐ・・・。」

彼の腰に手を回してがっちりと抱き着き、

耳元で熱い吐息を吐きながら囁き続ける。

性欲が昂っている彼の姿を見てしまった彼女は、

もう自分でも静止できない状況であった。

「ろーく♡しーち♡」

「・・・。。。」

ついに声も出せなくなるほど、限界を

迎えつつある増田。

ざりゆざりゆ、と彼女がつけているグローブのような

ものの柔らかくも硬い質感が彼のペニスに刺激を与え、

射精させようとしてくる。

「はーち♡」

「・・・あ・・・あ・・・。」

もうすぐ、もうすぐで十だ。

そうすれば解放される。

そう思っていた彼の目論見は完膚なき

までに叩き飲まされた。

「・・・ぎーんねん♡」

「!?!?ひっ・・・!?!」

——彼女は一気にその動きを速め、

一気にしごきあげた。

それまで、最後の一線を保っていた増田に耐え切れるわけもなく、抑え込んでいた情動を吐き出すかのように、精子を出した。

「あぐあああああああつ!!」

「・・・♡」

ぶるぶるとみつともなく、裸で震えながら

自分の手に射精するマスターの姿を見て、

マシユは快感を感じた。

自身の手によって、想い人があえぎ、その

みつともない姿をみせてしまっているのだから

当然といえは当然であるが、彼女はまだ足りない、と

言わんばかりにしごき続ける。

「先輩……♡もつと出せますよね？ね？」

「あ……。うう……。」

——それから30分ほどして、マシユに解放された彼は射精の疲れからか再び眠りについた。

子供のような寝顔で自分の胸で眠るマスターの頭を撫でながらマシユは微笑む。

「——おやすみなさい、マスター♡」

——かわいかったですよ♡」

実は相当恥ずかしかったのだが、裸だった彼の姿が辛抱たまらず、性欲に負けて搾り取って

しまった彼女は顔を赤らめながら彼の頬にキスをし、

一緒に眠るのだった。

分岐ルート D (○○○○○○○) ~一度ごまかしてか
ら発覚した場合~修羅場 in 食卓 ~抜け駆けした
もん勝ち

今でも俺は信じられなかった。

「……んん……。」

「」

目を覚ますと鼻につく、せっけんの
甘い香り。

柔らかく、温かな物体に包まれ、
ぎゅっ、と優しく抱きすくめられる。

「……すー。」

「……んん……。」

ベッドに美女、美少女たちが

同衾しているなど、一体だれが

予想できるというのだろうか。

目を覚ましたらハードモードどころか
ルナティックのオワタ式である。

体のあちこちに乗つかられ、

巻き付かれ、動くことさえできずに

固まり続ける。

意味がわからない。

マシユに手コキされ、気を失い、

目覚めたら他のサーヴァント達も

ベッドの中に入っていて、幸せそうな

寝顔で熟睡している。

何とか抜けだそうと体をよじると、

俺の腕や足に絡みついているサーヴァントたちの

力が一層強まり、皮がはがされるような痛みを感じる。

「あだだだだだだだ!?!」

人間の力を超えた腕力でつねられ、引つ張られ

耐え切れるわけもなく絶叫した。



彼女たちが俺の叫び声によって起床し、
押しつぶされかかっていた状況から

脱出した俺は、なぜか彼女たちと食卓に
つくことになった。

一体ここはどこかのか。

見たところ、20畳はあろうかという

広さの部屋に楕円形の細長いテーブルがあり、

その椅子に座らせられた。

それだけならまだしも、普通に食事を取り始め、
和気あいあいと話し込んでいた。

いわゆる、アルトリア顔のサーヴァント達は

実に楽しそうに食べ物を取りあたりして

おいしそうに料理に舌鼓を打っていた。

俺はというと、女性の群れの中にたったひとりの

男である。当然、肩身が狭い思いを感じながら
下を俯いて何も起きないよう祈りながら

もくもくと食べていると、くいくい、と横にいた
沖田に袖を引つ張られる。

「おしようにゆ取ってください。」

「お、おう。」

そういわれたのでしようにゆを沖田に渡すと
手と手が触れ合った。

「あ……。」と沖田が声を漏らしたのに気が付き、

あわてて弁明する。

不用意に相手の身体に触ると訴えらえかねないのだ。

これも、女子高生のバイトの子たちに気持ち悪がられた
経験から学んだことである。

ふー、と息を吐いて落ち着き、また黙々と

食べ進めていると今度は反対側に居たネロが

何かを期待したような顔つきで俺を笑顔で見つめている。

「……………」

「.....」

いや、一体どうしろと。

何を察しろというんだ。

言葉一つ発さなかつたので無視して

もきゆもきゆ、とパンをちぎって食べていると、

拗ねたのかネロが軽く腕を叩いてくる。

「~~~~むう~~~~!!」

「痛いっ!!痛いっ!!なんだよ!」

何がしたいんだよっ!」

「ふん。光栄に思うがよい。

余に食べ物を献上させる栄誉を与えようぞ。」

「.....」

イラツと来たので、手に持っていたパン事

ネロの口の中に突っこむ。

「ぶくおおお!」と驚いた顔をした

彼女は何を思ったのかもきゆもきゆとパンを

食べ始め、俺の手を噛んだ。

「いつ!?!」

「ふひよひよよひよ!!ひよにはははっははふは!!」

何を言っているのかわからなかったが、

ぶんぶんと手を振って彼女の口から手をすっぽり抜く。

ネロのよだれでベトベトになっており、

思わずドンびいた。

それを気にせずに俺があげたパンを嬉しそうに

食べ続けるネロの姿を見てため息をつき、立ち上がる。

「どちらへ?」

「手を洗ってくる。」

リリイに聴かれたので、ネロのよだれまみれになった

手を見せつけるとひきつ、とした苦笑いがかえってきたので

見せなきやよかった、と内心後悔しつつ、

部屋を出て、洗面台まで向かうのだった。



「——ネロさん、どういいうつもりですか？」

「む？」

増田が出ていったことを確認したりリイは

それまでの柔和な笑みを引つ込め、視線だけで人を殺せそうな無表情でネロを見つめていた。

その眼には嫉妬の炎が渦巻いており、ただならぬ様子を思い起こさせる。

「ふふふふ……♡あやつの手、

実に上手かったぞ♡精●だけでなく、

体のどこを味わっても美味などと、

まるで余に味わられるために生まれてきた

ようだな？♡」

「……ふざけないでください。」

熱っぽく、先ほど自分の手を舐め、味わっていた時のことを思い出しながらうっとりとした表情で

そう告げるネロに對し、リリイはどこまでも冷たい
声色で批難する。

「はいはい。ストップですよー。」

それ以上あの人に迷惑をかけようものなら

沖田さんが三段突きでぶつ殺しますからねー。」

どぼどぼ、と必要以上に醬油を目玉焼きに駆け、

それをおかずにご飯を食べる沖田。

ふう、と色つぼく息を吐くと、先ほど増田と

触れ合っていた指を触りながら、頬を染め上げる。

「——ところで、食後はどうする?」

それまで沈黙を貫いていたセイバー・オルタが

その口を開き、今後の事を尋ねる。

昨日の事を彼は覚えていないようであった。

それが何よりも悔しくて、嬉しくて、

——思わずオルタはその時のことを思い出し

獰猛な笑みを浮かべる。

「・・・まあ、やることと言ったら一つですよね。」

水着のアーチャー・アルトリアが体に食い込んでいる競泳水着を指でいじって伸ばしながら楽しそうに、待ちきれないようにつぶやく。

「じゃあ、まずはデートだな。あやつは自信がなさすぎる。」

世の中の男どもを嫉妬させ、優越感を与えてやらんとな?」

ネロの言葉に賛同するサーヴァント達。

彼の過去を知る者、知らない者、それは三者三様であつたがその心は一つであつた。

「——ところで、彼、遅くありませんか?」

手を洗いに行つただけなのに、いつまでたつても

返つてこない増田を心配そうな声で沖田がその身の安否を気遣う。

確かに、と彼女たちは考えた。

ネロに噛まれた手を洗うだけにしては時間がかかりすぎている。

それに、何か見落としているような――。

「……………ん？あの二人はどうしたのですか？」

「……………いない。」

それまで、お互いに相手の食べ物を奪い合い、

マスターにあげようとしていたヒロインエックスとエックスオルタは

ここにいたはずなのに、増田がいなくなるのと同じくらいに

消えていたランサーのアルトリアたちの事に気が浮く。

「……………まさか。」

◆

時は少し遡り、洗面台で増田が

手を洗い流していた時の事

彼は苦悶の表情を浮かべながら

必死に性欲と戦っていた。

(やべええええつ!!なんで皆あんないい匂いが

するんだよ!?!おかしいだろ!?!くっくっそ!!くっくっそ!!

朝飯食べてからムラムラするし……………。ううう…………。)

朝起きたら女体に囲まれ、包まれ、おかずの山が
目の前に広がっていた。

それでも歯を食いしばり、手を出さないよう自制心を

総動員して自分を抑えていた彼は限界を迎えつつあった。

(・・・く、苦しい・・・。抜きたい・・・。

性欲を・・・発散したい・・・!!)

こうなったらトイレでこっそり性処理するか。

覚悟を決めて洗面所から彼が出ようとするど、

とある人物たちが目の前にいた。

「・・・・・・・・マスター。」

「ふふふ・・・・・・・・。」

「!?ラ、ランサー!?!」

彼女たちの存在に気が付いた彼は、自分の

興奮していきり勃ってしまったているチン●を

腰をかがめて見られないよう増田は態勢を

低くする。

彼女たち二人はむしろその状態を待っていたのだが、

彼はそんなことを知る由もない。

そして、前後を二人に挟まれた増田はあそこに指をそつと置かれる。

彼の背中と、胸元に柔らかなモノが

押し付けられ、ふにゆり、とその形を変えてゆがむ。

女性に耐性のない増田は女神レベルの美女二人になすがままにされていく。

何よりもその凶悪なボディが彼を誘惑して

やまなかつた。

「あ、あばばばばばば!」

「マスター♡緊張しているのですか?♡

かわいいですね・・・♡」

「一緒にお風呂、入りましょう?♡」

あれよあれよという間に服を脱がされ、

彼女たちに挟まれながら増田は風呂場へと

連行されていった。

分岐ルート D (○○○○○○) ～一度ごまかしてか
ら発覚した場合～風呂場でダブル・乳上!～

合コン、というものをご存じだろうか。

男どもは自分よりも不細工を引き連れ、

女たちは自分よりもブスを率いて行われる

男女の出会いである。

かくいう、俺も前世や今生で何度か

この合コンとやらに参加したことがある。

当然、収穫はゼロ。なしのつぶてであったが。

一体、どうして俺はモテないのだろうかと

一時期は自殺も考えたほどであったが

それものど元を過ぎたのか今ではこじらせすぎたのか

かえって悟ってしまった。

——その原因は俺の恋愛経験の少なさに尽きる。

女子と話したことがあまりないから恋愛など

それ以前の問題。

外見や身にまよっている雰囲気がよくないのか

女子から嫌われやすいので、女子とまともに接することが

できず、経験を積めないのいつまでたつても女子慣れできない。

反面、一度でも女子と付き合つたことのあるやつはその後もあつさり

彼女ができるものである。

恋愛をして、恋人を一度でも得られた人間は幸運だろう。

少なくとも、モテないという劣等感を抱えることはもうないのだから。

——では、俺みたいなやつはどうしたらいいのだろうか？

答え⇒エロ本や、動画で猿みたいに精子を無駄撃ちして

しこつていればいい。

卑屈すぎる。ネガティブすぎる。

きつと俺の心情を知れば周りの奴らはそういうだろう。

だが、そう言われたらきつと俺はそれがどうした？と

言い返すだろう。

俺は持たざるものだ。

顔がいいわけでもない、話が面白いわけでもない。

金を持っているわけでもない。何か特別な才能があるわけでも、優秀なところも特にならない。

両親を喜ばせることだつてできなかった。

孫を抱きたいと言つていた母に、父に――。

知り合いが幸せそうに恋人の話をするたび、

なぜか胸が痛かった。

羨ましかつたのか。

傷をえぐられて、苦しかっただけなのか。

まあ、どうでもいい。

俺はきっと今回も上手くいかないのだから――。



そんな悲壮なモノローグを頭の中で展開し、

目の前の現実から逃げていた俺は目を開けて

意識を取り戻す。

「……んっ♡」

「……ふー♡……ふー♡」

ランサーのアルトリア。そしてそのオルタに
サンドイツチされながら風呂場で体を洗われていた。

あれよあれよといううちに、オルタの中に俺のモノが

なぜか入れられており、きゆうきゆうと締め付けてくる肉厚に

耐え切れず、うう、と声を漏らす。

なんでこうなったのかはわからないが、

彼女たちの目が怪しく光っていることだけは

確かであった。

立ちながらバツクで腰を動かす。

つながりながら壁に手を付いてがくがくと

足を震わせているオルタの弱弱しい姿を見て

胸の奥が熱くなる。

「ひいぐっ……ううー……♡最高ですう……♡マスター……♡」

耳に残る甘えるような、媚び混じりのオルタの声。

今まで俺に向けられるはずのなかった女子からの好意に
どうしたらいいかわからず、思わず固まっていると

俺の後ろからランサーのアルトリアが耳元でささやいてきた。

「ふふふ。♡マスターは、うぶ、なのですね?♡」
「・・・・・・・・・・。」

ぷいつと顔を横にそらす。

そんなものじゃない。

ただ単にこうした経験がないだけである。

だというのに、彼女たちはそれが嬉しいとばかりに

そうであつてくれてよかつたばかりに笑顔を

俺に振りまいている。

「あうう・・・・・・・・動いてください・・・・・・・・♡」
「お願い・・・・・・・・♡生殺しは嫌あつ・・・・・・・・♡」

「・・・・・・・・っ!」

ねだつてくオルタの声に導かれるように

俺は彼女の両手を掴んで後ろに引つ張り、

抵抗できないよう態勢を変えて後から

腰を振って犯す。

「きゃううっ♡あんっ♡あああんっ♡」

冷酷。無常。そんな彼女が俺の

肉棒を体で咥え込んで、心から

悦んでいる。

魔力パスを通じて感じる彼女の

幸福だという感情が俺に伝わってきて、

何とも言えない思わずオルタの腰に両手を

回して抱き着いた。

「あんっ♡赤ちゃんみたいです・・・♡」

「マスター♡おっぱいで洗って差し上げますね♡」

「ううう・・・!!」

オルタのあそこできゆうきゆうとペニスを締め上げられ、

後からはアルトリアのソープまみれのぬるりとした

柔らかな体で背中を洗われていく。

一体、これはどれだけ幸せな夢なのだろうか。

こんなに長く、いつまでも見続けていたい

夢というのは初めてだっただけに、

戸惑いながらもオルタを喜ばせるためピストンを

強め、アルトリアを感じるために彼女にキスをする。

「あんっ♡あああんっ♡・・・うあんっ♡」

「ん・・・♡」

「・・・ぐっ・・・!」

自慰にふけるのとは全く違う興奮度合い。

そして、体が想像以上に熱くなっていて、

性欲がたぎっていることもあいまり、

俺はオルタの中で果てる。

「~~~~~♡♡♡」

「ううう・・・!」

がくがくと体を振るわせ、足をぴんと立たせて

つま先立ちするオルタの顔に手をそつと添える。

すりすりとおおずりしながら、舌をだらしなく出して

あられもない表情で幸せそうにまどろんでいる。

「・・・いひい・・・♡お腹の中・・・♡」

マスターのでいっばい．．．♡」

「．．．オ、オルタ．．．。」

「．．．ますたあ．．．♡」

ペニスを引き抜くと、彼女の秘部から

どろり、と精子が垂れ落ちていき、

彼女はその場に崩れ落ちた。

立ち上げることができないのか、がくがくと

身体をけいれんさせながら、幸せそうに

アへ顔でうへへ．．．と女子がしちやいけない

笑い声をあげていた。

「．．．さて。次は私の番ですね．．．♡」

「．．．ア、アルトリア．．．。出したばっかで．．．その．．．。」

一回射精して冷静になったからか、

迫ってきた彼女を両手で押しつけ、一旦

落ち着かせようとしていた。

よくよく考えたら、そもそもセックスしているのは

おかしいし、きっとこれも一時の熱みたいなものだろう。

明日になったらいつも通り、単なる主従関係になるとか

あり得る以上、ここで踏みとどまり、いつもみたいに自分で

性欲処理する方がいい。

そう思っていた俺の目論見をあざ笑うかの如く

彼女は笑ったかと思うと見覚えのないものを取り出し、

それを口に入れて、キスをしてきた。

「!?!」

突然のことだったので対応できず、

彼女の口から送られた何かをごくんと

飲み込んでしまった。

「アルトリアっ・・・!?!」

「・・・ふふふ♡」

彼女が意味ありげに笑ったので、

一体ナニを飲ませたのか。聴こうとした瞬間、

どくん、と心臓が大きく跳ねた。

「・・・ぐ!?!」

「ふう……ふうふうふう……♡」

身体が先ほど以上に熱く、燃えているかのように体温が高まっていく。熱い。痛い。苦しい。

ペニスに血液が集まり、あつという間に膨張して先ほど以上の硬さを取り戻した。

「まだまだいけますよね？マスター♡」

「やめて……。やめてくれ……。」

身体を求めてきた彼女に対して自然と出てきた

言葉は拒絶の意志であった。

こんなことをこれ以上するわけにもいかない。

どうせまた、罰ゲーム、とか、ドツキリだったっていう

風になるから。

戦いは怖くない。

傷つくのは構わない。

——でも、恋愛だけはどうしても駄目だ。

慣れない。

床に押し倒され、騎乗位であれよあれよという間もなく

彼女はのしかかって挿入した。

「うう……♡は、入ってしまいましたあ……♡」

「お……おお……」

「動きます……♡いっぱい気持ちよくなりましたよ……♡」

彼女が上下に腰を振ることにぱんっ、ぱんっ、と音が

鳴り響き、体がびくり、と動く。

彼女は嬌声をあげ、俺は苦悶の声を漏らす。

マシユに手で慰められ、オルタに搾り取られたというのに

アルトリアまで——。

罪悪感で身体を動かさずにいると、彼女に

熱烈なキスをされる。

肺の中にある酸素を全て奪われると錯覚するほどの

ディーブな口づけ。

舌と舌が絡み合うたび、互いの口元が

よだれでベトベトに汚れていく。

女神として神々しさを放っていた彼女は

どこにもおらず、ただのメスがここにはいた。

「うう〜♡ううう〜♡」

まだイきたくない。

もつともつと楽しみたい。

そんな風に彼女は自分の手で自分の口を

抑えてうなり声をあげていく。

意識を他の事に向けて耐えようとしても、

彼女の甘い声がどうしても耳に届き、

現実に引き戻されてしまう。

そして、限界を迎え、欲望を彼女の中に

時はなつた俺は精子を放出する。

「♡♡♡♡♡♡♡♡」

「ぐうううっ…!!あぐあっ…!!」

息を吐き、歯を噛み締めながら射精する。

疲れからか意識がぼーっと遠のき、

まぶたが落ちていく。

「・・・ふふふ♡おやすみなさい、マスター♡

寝ている間は、私たちできっちりあなたを

お世話をしますから・・・♡」

「・・・マスター♡もう一度・・・♡」

分岐ルート D(○○○○○○) ～一度ごまかしてか
 ら発覚した場合く人・類・悪・けん・・・あれ？なんやこ
 のかわいい生き物・・・(困惑)く

「

「ふんふん♪」

ダブル乳上にからっからになるまで搾り取られ、
 目を覚ました俺が見たのは、俺をご機嫌で膝枕している
 彼女であった。

FGOをやっている人間ならば知っているであろう、
 主人公のうちの1人。

女性キャラの方の藤丸立夏。
 通称ぐだ子である。

この人物だが、とある漫画に出てくる彼女は

非常に強烈なインパクトを持っている。

ガチャの悪魔、魔人柱、いや、人類悪と

言われるほどネタにされており、おおよそ

女子らしからぬキャラづけにされていた。

FGOをやっていた俺にとつても、彼女は

どうしても女性らしきナマモノとして

見えており、同性の友達的な感覚で接していた。

小さな子供を相手にするときと同じく、

ドキドキしないので自然と話せ、助かる

ので、彼女、ぐだ子とのひとはある意味癒しであった。

目の前にいる彼女が俺の知っている彼女と

似ても似つかないことには驚きを禁じ得ない。

甘いせっけんの香りがふわりと鼻をくすぐり、

こちらの脳をしびれさせてきた。

後頭部に感じる柔らかな感触が

彼女のスタイルの良さを訴えてきて、

興奮が冷めない。

(え??.え!?なんだこれ!?)

うわつ、めつちやいい匂いする..。

柔らかい...。)

うつすらとまぶたを開けて、覗き見ると

彼女がにこにここと笑いながら俺の

くしゃくしゃになって頭をそつと撫でていた。

「~~~~♪」

(...ゆ、夢?マシユといい、ダブル乳上と言い

性欲が溜まっているのか俺...。)

夢だとしても股間に血液が集中しているのは

間違いなく、苦しいのは現実問題である。

もぞもぞと体を動かし、どうにか股間の

モノを気づかれないようしていると、

さわり、と股間に彼女の手が触れる。

「...っ!」

「・・・お、おつきくなっている・・・。

・・・ね、寝てるよね?」

「!・・・。。。」

「・・・う、うん。

・・・仕方ない・・・仕方ないよね・・・?」

独り言をぶつぶつとつぶやきながら俺の

ズボンをするすると降ろし、手で俺のペニスを

握り締める立夏。

指が亀頭を持って遊び、せわしなく俺を

責め上げ、快樂を送り続けてくる。

腰が跳ねそうになるのを足に力を入れて

踏ん張り、ぶるぶると体を小刻みに震わせ

彼女の攻撃に耐える。

「・・・すごい・・・。。。

硬い・・・♡」

「・・・っ!・・・!!」

熱い吐息を吐きながら彼女がそういうや否や、

先走り汗が出て、ぬるりとぬめり始めたペニスがくちゅくちゅと音を立てはじめる。

にちや、にちや、とどろどろになっっていく

ペニスに彼女がよだれを垂らし、さらに

滑りを良くしてくる。

「……はあっ♡はあっ♡……あ、でそうかな……?♡

……ふふふ♡いっぱい出して……♡」

「……っ!!っ!!」

「きゃんっ♡♡」

我慢の限界を迎えた俺は、ぶるりと体を震わせ、

大量の精子を吐き出す。

彼女の手の中に精子を無駄打ちし、

身体から力が抜けていく。

尿道に残っている精子を搾り取るように

彼女の人差し指と親指が俺の龟头をしごきあげていく。

起きていることを気づかれないように、

声押し殺し、身体から力を抜く。

そんな俺をいたわるかのように、彼女が

俺の頭を撫で、甘い声でささやく。

「……………いっぱい出せたね♡えらいえらい♡」

「……………っ……………っ……………!」

有り余る母性を放ち、柔和な笑みを浮かべる彼女の姿に体が熱くなる。

そして、それは射精したばかりのペニスに再び

血液が集まるということであり……………。

「……………あっ♡また大きく……………♡」

「……………っ!」

「……………寝ているから、仕方ないよね?♡」

「!!」

ぼすん、とベッドに押し倒され、

今度は彼女の胸でペニスを挟まれる。

着やせするのか、想像以上に大きい

Fカップ以上であろうその胸に、
いつも着ているカルデアの服をはだけさせ、
胸で俺のペニスが収まった。

「はあ．．．♡はあ．．．♡」

「．．．．．」

やばい。

彼女がこんなにかわいく、女らしいと知らなかった。

だからだろうか。

彼女の頭に手を置き、無理やり加えさせてしまったのは。

「~~~~~!!?~~~~~♡♡」

「．．．くっ!!うううっ．．!!」

「ん~~~~♡ん、ん、ん~~~~♡♡」

最初こそ目を丸くして驚いていたが

俺が起きていたことに気づくと、

口をすぼめ、胸に挟みながら俺の

モノをしごきあげていく。

そんな姿が煽情的で、エロくて、

滅茶苦茶にしたいと感じてしまう。

苦しそうなのに、決して俺のモノを

離そうとしないのが独占欲をそそってくる。

たまらず、二回目の射精を彼女の

胸の中でしてしまう。

「・・・っ!!ぐうううっ・・・!!」

「♡♡♡♡♡」

収まりきらない精子が彼女の顔にかかり、

べちやり、と白い白濁液がついた。

ぼうつと呆け、数十秒ほど恍惚とした

表情を浮かべていた彼女は自分の顔についていた

俺の精子を指で掬うと、いとおしそうに口に啜える。

「・・・えへへ♡・・・起きてたんだね・・・♡」

「・・・。」

最初から見透かされていたのか、本当に途中から

気が付いたのか。

それはもはやわからないことだったが、こんなものでは
まだまだ足りなかった。

そんな俺の意図を察したのか、

俺にお尻を向け、四つん這いになって

彼女が誘ってくる。

「……あ、あのね……」

「……いっばい、してほしいな……♡」

「!!はあっ!!はあっ!!」

「あっ♡レイプされるっ♡犯されるうっ♡」

彼女のスカートの中に後ろから手を突っ込み、

パンストをパンツを膝近くまでズリ降ろす。

愛液でぐじゅぐじゅに濡れた秘部がひくひくと

動いているので指を入れる。

しつかりと啜え込んで、引き抜こうとすると

締め付けて、離さないと言わんばかりに

うごめく。

じつくりと中を指で解きほぐし、引きぬいて

ペニスの亀頭をそつと押し付ける。

「．．．名前え．．．♡呼んでえ．．．♡」

「!!立夏!!立夏あつ!!」

「あつ♡あつ♡犯されているっ♡」

レイプされているうっ♡孕んじやうっ♡

孕んじやうよおっ♡ゝゝゝ♡」

枕に顔を押し付け、うっ、うっ、と

うめき声をあげる立夏の腰を両手で

がっちりと掴み、後ろから激しく突いていく。

俺が腰を動かすたびに、彼女もそれに合わせて

動き、犯されていく。

嬌声をあげ、よがり狂う彼女の姿を見て

ますます昂り、枕に顔を押し付けている彼女を

仰向けにし、態勢を変える。

恥ずかしがり、手で顔を隠そうとする

彼女の両手首をつかみ、羞恥と熱気で顔を

赤らめている立夏と見つめあいながらまぐわう。

「~~~~♡だ、だめえっ♡見ないでっ♡

見ないでえええっ♡」

「ぐっ!!うううっ・・・!!」

見られていることで興奮したのか、

中の締め付けが一層強くなり、

しごきあげられていく。

舌を出し、焦点があっているか怪しい

ト口顔をさらして喘ぎ続ける彼女に

自分から口づけをすると、それに応えるように

彼女が身を委ねてくる。

唇を重ね続け、相手を互いに貪り続け、

重なり合う。

体の奥底から射精感がせりあがり、

彼女の中に白い欲望を吐き出す。

「~~~~♡♡」

彼女がびく、びく、と体を跳ねさせ、

がくがくと痙攣し、そしてだらり、と
身体を弛緩させる。

小さくなったペニスがずるり、と彼女の

中か抜け出て、ごぷり、と精子が溢れでる。

「……………ねえ。もう一回、して?」

「……………!!!」

「あああつ♡だめえつ♡もつとお♡」

ありとあらゆる態勢で、なぜか部屋のクローゼットにあつた

コスプレを彼女にきさせ、シャワーを浴びているときに

後から手籠めにしてセックスし続けた。

気が付けば、夜になっており、

愛液と精子で穢れたベッドで息を荒く

吐き、肩で呼吸をしながら横たわる俺と彼女。

上にはブラだけを、下にはパンツと黒のパンストだけを

はいたマニアックな格好の彼女が俺の耳もとでささやく。

「・・・きもち、よかったあ・・・♡」
「」

ありとあらゆる水分を出し続け、

昨日以上にからっからに搾り取られた

俺はかろうじて息をしながら思った。

——ぐだ子、ばねえ、と。

女で絶倫だと、男は死ぬかもしれないということ

30代目前で知ったのだった。

分岐ルート H(○○○○) ~童貞をこじらせにこじらせていた場合~あーもうめちやくちやだよ(棒読み)~

「……え、なにこれは……。」

自分が置かれている状況に対して困惑した声を出し、

あたりを見回す増田。

興味津々といった体で男性サーヴァント達が

彼の自室に詰め掛けていた。

誰も彼もが中学生のようなノリで勝手に

お菓子を食べたり、ゲームに興じたりして

思い思いに遊びふけている。

「ちよつと聞いていて確認したいことがあるのだが。」

「ああ。」

「え?」

お茶を慣れた手つきで組みながらエミヤンが

そう問いかけてくる。

隣でせんべいをぼりぼりと食べているクー・フリーンは興味深そうに耳を傾けている。

「——マスター。」

「うん？」

「童貞を捨てたいというのは本当かね？」

ぶふあつ、と飲んでいたお茶を吹き出し、

近くにいた黒ひげにぶっかかる。

「あつっ!? 下手な拷問よりもきついんですけどー!？」と

叫びながらアステリオスにタオルで拭かれているくろひーに

謝りつつ、エミヤンをキツとにらむ。

「——べべべべ、別にそんなななこととどないけどどつどつどど？」

冷静に言うつもりだったが予想以上に動揺していたらしく、

どもりきつて怪しい人みたいになってしまった。

恥ずかしさに突っ伏していると、彼らが息を飲む音が

聴こえた。

「……?」

「気にするな。・・・うむ。」

「・・・・・・・・愁傷さん。」

「???'」

彼らの言っている意味はよくわからず、頭の中に大量の疑問符が浮かび上がっているとエミヤンが聴いてくる。

「・・・・・・・・ちなみに、恋愛経験は?」

「ねえよ(半ギレ)」

「そ、そうか・・・・・・・・。」

即答した俺に少し引いたのか、聴いてはならないことを聴いてしまったと罪悪感を持ったのか

ひきつとしたシニカルな笑みを浮かべたエミヤンが身を引く。

対して、にやり、と獯猛な笑みを浮かべた

クーフリーンが言ってくる。

「なんだ?まだだったのか?・・・・・・・・だったらよ。」

うちのどこにいろどつかの誰かさん達に

相手してもらえばいいんじゃないの？」

「は？」

何を言っているのだろうか。

ここにいる誰かさんたち？

つまるところ女性サーヴァント達のことを

言っているのだろうか。

確かに彼女たちは美人で、かわいくって、

スタイルの良い女性ばかりである。

しかし。

「.....」

かわいそうなものを見るような笑みで

彼らをふつと鼻で笑って言う。

「——出来るわけねえだろ。」

こっちは平平凡凡のモブ。

あちらさんはキレイどころかつ、

世界にその名を遺す偉人さん方。

「とういかな。ねーわ。女って

皆面食いだろ？小学生のころからの

扱いで知っているから。中身とか

ないから。人間、外見で人を

判断するんだよなあ・・・(確信)」

ブサイクの俺が女子に優しくしたり、

助けたりするだけで泣かれたり、

あいつキモイ、調子乗ってね？と

リア充グループからいじめられたりなど

日常茶飯事。

対して、イケメンが同じことをすれば

きやびつとした声を出し、ありがとー、と

決して俺には向けられる事のない笑みがこぼれだす始末。

思い出すだけで吐き気がしてきたので

意を抑える。

「顔」ブサイク」女と付き合えない」風俗しか

セックスできる機会がない＝Q.E.D. 証明完了。
というわけで、俺、ここをそのうち抜け出して

綺麗なおねーさんたちに筆おろししてもらおうから。」

「……………」

「……………」

俺のぶつちやけすぎた本音に開いた口が塞がらないのか、
エミヤとクーフーリンがばくばくと金魚のように口を
ばくつかせ、顔を真っ青にしている。

モテ鬼はわかるまい。

この気持ちは。

あ、なんか胃が痛くなってきた。

ベッドで昼寝をしたい気分だったので
好き放題に騒いでいる奴らを強制的に
部屋の外に追い出していく。

「———とかいつまで俺の部屋にいんだよ!!

帰れ帰れ!!」

「えー？マスター。いつしよに寝ようよ。」

「……ま、まあ余は……余は……。」

「……ぼ、僕は……。」

「早く帰れ (早口)」

なぜか見ているとお尻の穴が最近きゅつと締まる

アストルフオ、ラーマ、デオンの男の娘三人組や、

未だに硬直して固まっているエミヤたちの身体を押し

外に出し、ベッドにダイブする。

……ちよつと感情的になりすぎたか？

枕に顔をうずめながら深呼吸する。

あー、もうこのまま窒息したら楽になれそう。

前世の記憶を引き継いで、圧倒的に

有利な条件で人生を送っていたにもかかわらず、

外見は変わらずに、結局彼女いない歴〓年齢のゴブリンに。

土砂崩れ起こしたような顔って言われたときは

哀しみを通り越して笑いさえ湧き上がったものである。

モテないというのは本当につらい。

男として、自分が価値のない存在に思えて、

この世から消えてしまいたくなるから。

だが、そんな日々ももうすぐ終わりである。

スマホを取り出し、自分がブックマークした

風俗店のホームページを見る。

「・・・・・・・・へへへへ。」

金ならダヴィンチちゃんから給与として

大量にもらっているのですその辺は大丈夫である。

後はさっさと日本に行つて、童貞を捨てるだけ。

その時のことを想像するだけで心臓が

バクバクと激しくなつていく。

カネだ。

カオがだめならカネで落とせばいい。

どうせ一夜限りの相手だ。

プロが相手なら気兼ねなく自分の

欲望を発散できるといふ者だ。

(あー。辛抱たまらん。)

これからのことを妄想しながら
まぶたを閉じて眠りにつくのだった。



「……………あー。」

「……………」

「予想以上だったなあ……………」

どうしたものかと途方に暮れる男性サーヴァント達。
エミヤとクローリーンは互いに顔を見合わせながら
先ほどの様子を思い出す。

思った以上に童貞をこじらせ、女性不信である

自身のマスターの事を。

彼の言い分は、彼らにはわかった。

時代、価値観の違いはあれど異性に全く男として見られないという気持ちを理解できないほど、彼らは共感性が低くはなかつた。

『なるほど。』

と、そこにノイズ交じりのボイスが突然廊下にこだまする。自分の服の裏側に付けられていた小型の機械を取り外し、エミヤはそれに対して声をかける。

「……あ。あー。マスターは、君たちのことを、
だな……。」

『知っています。聴こえています。……ええ。
怒っていません。先輩に対して。これっぽっちも。』
(……それは、怒っているというのでは。)

機械の向こうにいるマシユはきつと、目が笑っていない
笑顔を増田の事を考えながら浮かべていることを察し、
エミヤはため息を吐く。

気まずそうな顔のアーラシユや、アマデウスは何かフオローを
入れようと思っていたが、それも意味が全く
ないことを悟った。

「……です。直接先輩に聴こうかと。」

「……怒っていませんよ?」

『……………』

各々の戦闘服に着替えた女性サーヴァント達が
彼らのすぐ近くに立っていた。

それぞれが、異様な殺気や飢えた獣のような
オーラを身にまとい、ぞろぞろと歩いていく。

その威圧感に気圧された男性サーヴァント達は
身を強張らせ、道を譲っていく。

さながらモーセが海を割り、エジプトから逃れたときのような
光景が広がっていた。

呑気に爆睡しているであろう増田の部屋に、

109 分岐ルート H (〇〇〇〇) ~童貞をこじらせにこじらせていた場合~あーも
ちやくちやだよ (棒読み) ~

嬌声ばかりがわずかに聞こえる程度となるのであった。

童貞を捨てた後、逆に考えるんだ。上書きして、自分のモノだつてマーキングしまくればいい、と（震え声）その1、

「ミラバケツソオオオオオオ!!」

両腕を広げてアラレちゃん走りしながら方向をあげていく。

そんな俺の奇行に目を丸くしたり、

ぎよつとした顔で見つめてくるサーヴァント達。

今の俺にとつてはそれさえも気持ちよく、

どうでもいいほどにテンションが上がっていた。

「ディアゴステイー〇イイイイ!!」

創刊号だけ買って、すぐに飽きる

あの雑誌イイイイイ!!」

『おんやんこい!!』

「あつ、はい」

食堂で叫んでいたら他のサーヴァント達に
ガチギレされてしゅんとなる。

自室のベッドに横たわり、枕をぼすんぼすんと
殴りながら飛び跳ねる。

Mr. ビー〇もグッジョブするであろう
器用な動きである。

しかし、顔のにやけが止まらない。
気を抜けばすぐに緩んでしまい、

どうしようもないほどにゆるゆるである。

(きた!!俺の時代来た!!)

もうチェリーじゃねえ!! 今日から俺は
ぶどうだ!!)

結論を言おう。

◆ 俺は童貞を捨てた。

「はぐ。」

『……………』

マシユがその場にいる女性サーヴァント達に
対して取り仕切るように声をかけると、

彼女たちは目をぎらつかせながら

視線を注ぐ。

その数は優に100を越えようかという

大人数であり、既に増田は眠っている時間帯であつた。

たまたま起きていて、この集会を目撃してしまった

男性サーヴァント達は口封じのためにスタンはめされ、

ロープでぐるぐる巻きにされて、床に転がされていた。

「皆さんもう気が付いているかもしれませんが、

近頃、マスターの様子がおかしいです。」

マシユの言葉に、他のサーヴァント達は一様に頷く。

普段はあれほど声をあげることも、奇行に走ることも

ないだけに、それを目撃した彼女たちにとっては

衝撃的であった。

「で、ダヴィンチ所長。」

「はいはい。」

マシユにその名を呼ばれたダヴィンチ女史は

優雅に紅茶を飲みながら、マシユの呼び声に応じて

振り返る。

その顔つきは何かを面白がるように、満面の

笑みと、好奇心が抑えきれないといった様子で

若干そわそわしていた。

「マスターのことについて、何か知っていますか？」

「うーん・・・。」

そういう風に聞かれた彼女は

顎に手を当てて考え始める。

ただし、それは心当たりがあるかどうかではなく、

——すなわち、『ここで言っちゃったほうが面白いかな？』

もうちよつと引つ張つてみようかな？』という悪趣味

極まらない考えであるが。

(いやいやいや。予想通りではあつたけど、まさかほぼ全員が来るとは。……何人かは怒っているのかな?)

ちらり、と彼女が目線を向ける先には、明らかに不機嫌なオーラを放ち、獲物を研いだり、整備しながら話を聴いている者たちがいた。

女特有の勘が働き、既に気が付いているが、それを認めたくないというジレンマで武器を構えながらも、話を聴いている。何とも言い難い状況である。

やばい、ちょー面白い、と彼女は心の中で爆笑していたが、

ここで下手に刺激すれば自分があぶない目にあうことを察し、告げることにした。

「——いや、私を知っているのは些細なことだよ。」

「……些細、ですか。」

「うん。」

「……」

それ以上の追及はなく、沈黙があたりを支配する。

時間が経つにつれ、空気が重くなっていき、床に寝かされている男性サーヴァント達は座に帰りたいたい気持ちになった。

「まあ、聞き給え。——例えば、だね。」

童貞である男性はどんな女性を好むと思う？」

「……？それは、せ、せいこう……いの経験がない相手では……？」

自分で言っていて恥ずかしくなったのか

マシユは顔を若干赤くしながらもダヴィンチの質問に答える。

「それは1つの解だね。——実際のところ、

外見が好みならそれでいい、つていうのが多いそうだよ。」

「何が言いたいんですか？」

「ま、彼も大人になったというとき。」

—— 今まですつと近くにいたのに、

それを他の誰とも知らぬ女が

かつさらっていった。—— ああ、

その心中は筆舌に尽くしがたいだろうねえ。」

「!!」

ぎりい、と歯を思いつきり噛合わせる音が

響き、部屋の気温が2度下がる。

険悪な雰囲気広がりが、あわや彼女に

襲い掛からんと何人かのサーヴァントが

構えた瞬間、ダヴィンチは懐に手を伸ばし、

胸元から何かを取り出す。

それは、小さな小瓶であった。

中にはどろりとしたピンクの液体が

入っている。

「・・・それは？」

「惚れ薬。」

がちやん、と武器や道具が落ちる音がした。

彼女が取り出したものを食い入るように見つめ始める

サーヴァント達。

その思いは皆、一つであった。

「・・・さて、ここで提案なんだけど、

話を聞く気はあるかい？」

「・・・続きを、おねがいします・・・。」

自分がやってはいけないことに手を出している

事にマシユたちは気が付いたが、それも

すぐに忘れ去られる。

——に、と獯猛な笑みをダヴィンチは浮かべたが、

それに誰も気が付くことはなかった。



童貞捨てて、イキっていたら「逆にまだ童貞だったんですか？」と何人かのサーヴァントにマジレスされて、ベッドでふて寝していると、扉がノックされる。

「はい？」

『あ、先輩、私です。』

「どうぞー。」

夜分にマシユが尋ねてくるなんて珍しいと思いつつも、中に入るように言う。

ドアが開けられた先には、

いつもの私服ではなく、可愛らしい

ピンクのパジャマを着たマシユが立っていた。

手にコップを二つ持っており、

何かの液体が中に入っていた。

コップ、サツ（逼真）、うっ、頭が……。

一瞬、何か恐ろしい映像が流れたような

気がしたが、それも気にせずに彼女から

飲み物を受け取った。

「ありがとう。」

「い、いえ。．．．よし。」

「？」

可愛らしく気合を入れる彼女の姿に
萌えながらも、喉が渴いていたので
早速飲み干していく。

「ああー。うまい。これは何の飲み物なんだ？」

マシユ。．．．マシユ？」

「はあっ．．．♡はあっ．．．♡」

「」

——いつの間に着替えたのか、デンジヤラス・ビーストの
衣装をマシユが着ていた。

目は潤みきり、自分の身体を抱きしめるように身を

くねらせ、俺のベッドでもぞもぞと動いている。

後輩の豹変に驚きながらも顔が赤いので

手を取ってみると熱かった。

「あつつ!?!ちよ、かぜかこれ!?

ていうかいつの間に着替えた?!」

助けを呼ぼうと立ち上がろうとすると、

背中を引つ張られベッドに押し倒される。

—— ついで、唇に柔らかな感触があつた。

「.....」

「

口の中に舌をつっこまれ、ぬちゅぬちゅ、

と唾液が混じる音が響き、口の端から

唾液が零れ落ちていく。

自分がされていることが信じられず、身を強張らせながら

ただただ、貪られていく。

ようやく離されたかと思うと、手を取られ、

胸に手をもっていかせられる。

柔らかく、重みのある弾力が手に伝わり、
若干放心しながら、ゆっくりとそれを揉んでいく。

「アツ♡アアツ♡」

それはマシユのマシユマロだった。

何が起きている？

何があつてこんなことになっている？

疑問は尽きなかったが、今の俺にそんな

ことを考える余裕はなかった。

「先輩・・・♡」

「・・・！」

ベッドであおむけに寝転がりながら、

熱っぽい声で俺の名前をよぶマシユの

姿に心臓が激しくなる。

（お、俺はこんなことでは動揺し）

「・・・すきに、してください・・・♡」

（あ、だめだこれ）

むしろ俺が好きにされそう、と

彼女に襲われながら思うのだった。

サマーヒート・デッドレース!!イシュタル・カップⅡ!!
あれ?優勝賞品おかしくね? (震え声) ～その1

「あつい・・・。」

「マスター。あーんしてくれ。あーん。」

先日来たばかりの沖田オルタに

練乳アイスバーを差し出すと、おいしそうに

ガリガリと音を立てて咀嚼する。

小動物チックな彼女のそんな姿にじんわり

胸が温かくなり、ちよつと和む。

今、俺たちはカルデアのプール施設に

やってきていた。

ダヴィンチちゃん考案の温水にもなる

設備であり、夏になると暑気払いのために

解放されているらしい。

かくいう、俺たちと同じく涼みに来ている

サーヴァントばかりである。

「ちよつと!!なんであんたには水着姿があつて

私にはないのよ!!冷酷女!!おかしいでしょ?!

新宿の時、明らかに私メインヒロインだったじゃない!!」

「今の私は、マスターの下のお世話もできる

パーフェクトメイドさんだ。貴様では荷が重かろう。」

「今年の夏こそ!!沖田さんの水着を!!」

沖田さんの水着をおおお!!」

「この前、帝都のイベントでお主のオルタが

出たばっかじゃろ。」

「私とは別人じゃないですか、やだー!!」

一部、不憫な会話が聴こえてきたが無視である。無視。

とりあえず、今年こそナイチンゲールやアルトリアのランサーの

ほうのおっぱいが水着姿で拝めますように、と祈る。

そんな阿呆なことをぼーっとプールで考え事をしている

そういえば今日はやけにサーヴァントの数が多いな、とふと感じた。

ダヴィンチちゃんの話では、そこまでプールに

来るサーヴァントの数は多くなく、ましてや

ほぼ、全女性サーヴァントがいるなんて、

今日は何かあったのかな、と彼は考えていた。

シートにもたれかかりながら、コーラの入ったグラスに

挿さっているストローでちゅうちゅうと水分補給を

していると、色んな貼り紙がしてある案内板が騒がしい。

(・・・。。。?なんだ?)

気になったのでシートから降りて歩いていくと、

そこには、人だかりがいつの間にかできていた。

女性サーヴァント達が水着姿で所狭しと

その案内板に貼られている貼り紙を見ている。

(・・・行くしかないか。)

まるで、混雑しているときの電車並みにぎゅうぎゅうである。

奥の方に歩こうとすれば誰かの柔らかな体がむにゅりと

背中や胸元にあたり、思わずすこしかがんでしまう。

それに加え、ひな鳥のように俺にくっついてきている

沖田ちゃん existence も俺にとどめを刺しに来ていた。

(ああああああああ!! 無理無理無理無理いいいい!!!)

仕方ないので、他の女性サーヴァント達に体が当たらないように

かがみながら進み、ようやく貼り紙の前までやってきた。

そこに掛かれていた文字を見て、思わずつぶやいた。

(……まじかー)

—— 『イシユタル・カップⅡ開催決定!!』

見たことも、聴いたこともないイベントが開かれようとしているのだった。



『さあ!! 今年も忘れられない夏がやってきたわよー!!』

『うわああああああ!!』

「……」

「せ、先輩……」

死んだ目つきで自分のマシンを黙々と

いじる俺にオロオロとしながらも声を掛けてくる

我が後輩。天使・オブ・天使のマシユ。

その周りでは、俺と同じレースの参加者である

彼女たちが所せましと並んでいた。

——ただし、本来のイシユタル・カップの

参加人数ではなく、100人以上という大所帯である。

『一体、誰が予想したのかー!?ほぼ、

全ての女性サーヴァント達がまさか参加することに

なるとは!!そしてまさかのマスターである

増田の電撃参戦!!イシユタル・カップII!!始まるわよー!!』

「……………」

「先輩……………」

水着姿のマシユに膝枕されながら

俺がこのレースに参加することになった経緯を

思い出していく。

全ての始まりはあのプールサイドであった。



「……………なんじゃこりゃ。」

「マスター。なんだこれは?」

貼り紙に『イシユタル・カップII開催!!優勝賞品は

マスターに何でもしてもらえる権利!!』と書かれていた。聴いていない。俺は、イシユタルやダヴィンチちゃんから何も聴いてはいない。

というか、なんだこれ。なんで俺が言うことを聴くことになっっているのか。

わけもわからず立ち尽くしていると、いつの間にか隣にイシユタルが立っていた。

「はあーい♡増田。今年の優勝賞品はあんただから♡
が・ん・ば・って・ね♡」

商品を仕入れなきや、とつぶやいて俺の傍から立ち去るイシユタル。

がぐ然としていたが、ある重要なことに気が付く。
(・・・別に、俺に何かしてほしいやつとか

いないんじゃない?)

これでも現実の厳しさというものは知り尽くしている。

俺が実質優勝賞品になっているからといって、女性サーヴァントが参加するわけもなかった。

聖杯ならともかく、わざわざレースに参加する

メリットもないのだ。

(なんだ。じゃあほつといてもへーきへーき。)

そう思っていた矢先、周りにいたサーヴァント達から

視線が集まっていることに気が付く。

大方、イシユタル・カップⅡについての好奇心だろう。

優勝賞品になっている俺のことを面白がっているだけだ。

俺は、彼女たちの視線を受けながらも沖田オルタを

連れてプールサイドを後にするのだった。

◆

——そんな風に考えていた俺を、令呪を三画使用して

オーバーチャージした宝具をぶち込んでやりたい。

ダヴィンチちゃんといシユタルから『運営や、

企画で忙しいから(あんた)君が参加人数を集めてくれ(なさい)』

と言われ、しぶしぶと参加者を募った結果。

まさかのほぼ全員参戦である。

アイエエエエエ!!?大乱闘スマッシュ・シスターズ!?

ナンデ!? (新作発売おめでとう)

ドラゴン・ボー○じゃねーんだぞ、と突っ込むもそれは意味もなく、あれよあれよという間にレース当日を迎えてしまった。

俺に出来る抵抗としては、俺自身が参加して、

他の奴らの代わりに優勝してしまうことぐらいである。

もう、恥も外聞もなく男性サーヴァント達に

事情を説明して協力を取り付け、なんとかマシンを

確保することができた。

その名も……。

「マスター。準備ができたぞ。」

「できたぜ。」

「ああ、あんがと……。」

「それじゃ、先輩。」

自分が組んでいるチームのところまで行く

マシユ。

そう、彼女は俺の味方ではないのである。

——俺の視線の先では『女難波船』と

書かれた凸シールが貼られている

水曜どうでしょ○でも使われていた

銀色のバンがあつた。

やけに気合の入ったオリオンと、

エミヤンが待っていた。

「つしやあ!!やるぜ!!俺はやるぜマスター!!」

「ふむ。食糧や生活用品に不備はないな・・・。」

ちよつと心配だが、アーチャーとしては最高クラスの

腕前を持つ二人がいるので大丈夫だろう。

——女難組であり、なんやかんやモテる2人は

俺の敵でもあるが。

ばるばるばる、と嫉妬の視線を送っていると

会場にアナウンスが響く。

『さあ!!そろそろ始めるわよー!!』

皆ー！ー！カウントダウン!!

いっくわよー！ー！』

『5!!!』

何としても勝たなければならない。

そう、勝たなければ優勝した他の

女性サーヴァント達に一体どんな

目にあわされるのかわからない。

『4!!!』

ハンドルを握る手に力がこもる。

心なしか、いつもより力がみなぎっていた。

アクセルを軽く踏み、昂る気持ちを

抑えつつ、目をつむる。

『3!!!』

「しかし、知らなかったぞ。マスター。」

カウントダウンがもう少して終わろうというその時、

エミヤンが弓を手入れしながら俺に話しかけてくる。

『2!!!』

「まさか、普通免許を持っていたとはな。」

エミヤンが感心した、といった様子でそう

話しかけてくる。

隣では、本気の雰囲気のアリオンが矢に

何やら塗り込んでいた。

『1!!!』

「……え?持っていないけど?」

「……は?」

「えっ。」

俺の言葉に対して間の抜けた声を出す2人。

一体、何を言っているのだろうか。

俺は、自分がドライバーをやるといっただけで、

免許を持っているなど言った覚えはこれっぽっちもない。

「……マスター、降ろ」

『GO!!』

「あ、よいしょ。」

レバーを引いて、思いっきりアクセルをべた踏みする。

急激な発進で後ろの方に吹っ飛ばす二人。

何かを言おうとしていたようだが聴こえない。

いやあ、レースが始まってしまったから仕方がない（棒）

「マスター!! やめろ!! 今なら間に合う!!」

ちゃんと夏季合宿で免許を取ってくるんだアアアアアアアアアア!!」

『さあ!! 始まりよ!!』

—— エミヤンのそんな叫び声は会場の熱気と

歓声で遮られるのだった。

サマーヒート・デッドレース!!イシュタル・カップⅡ!!
気が付いたら逆レイプされていた件～その2

『さあ!!ついに始まったイシュタル・カップⅡ!!

最初に先頭に躍り出たのは——!!?』

「……ぶつちぎるぜっ!!」

」

「へへ……。こんなん富士○

ハイランドのアトラクションに比べれば……

あつ、やつばむオロロロロロロ」

イシュタルの実況や、観客の声援を受けて

レースが始まり、一斉にスタートした俺たち。

先頭にいきなり出ることができ、幸先の

良いスタートを切れた。

後部座席で寝込んでいるエミヤんと

エチケツト袋に胃液を吐き出しているオリオンという

犠牲はあったが、これも勝つためである。

仕方ないね○

『さあ!!最初に差し掛かったポイントは、

A平原!!一体どんな展開となるのか、

目が離せないわよー!!』

あれ? A平原って去年と一緒にじゃね?と

思ったが気を取り直して先に進むことに。

「……よし、このままリードを……ん?」

『……アアアア』

更に差を広げるためにアクセルを強く踏む

俺の耳に何やら聞き覚えのある声が聴こえてきた。

それも、周回とかでお世話になっているときの――。

ぞくり、と本能的に俺は道路を外れ、

平原に躍り出る。

——次の瞬間、空から流星が降ってきた。

『ステラアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

「マジかよおおおおおおお!!?」

当たったら間違いなく死ぬレベルである。

隣にいた、同じアーチャークラスの二人も

目を丸くしてその威力に絶句している。

「ちよ、なんだあれは?! 神霊クラスの攻撃だぞ?!」

「いやだああああ!! 出オチはいやだああ!!」

負けたらアルテミスに死ぬまで逆レされるううう!!

監禁されるのはいやなによおおお!!」

俺たちの先には、岩の上に立ち、

弓を構えたまま立っているアーラシユ・カマンガーの

姿が見える。

がくり、と膝を彼がついた。

彼の宝具、『流星一条』は莫大な威力の一撃を繰り出す代わりに

自分が消滅してしまう切り札である。

まともにもやりあったら勝ち目のない相手であるので、

いきなり宝具を打ってくれてこちらとしては

不幸中の幸いである。

「俺のドラテクを舐めるなよおおお!!」

ギユギユギユ、ギヤリギヤリギヤリりとタイヤが削れる音と共にハンドドルを激しく動かし、済んでのところでは流星一条を避ける。

着弾した地面から衝撃波が発生し、後ろにいた

サーヴアノト達を襲う。

バックミラー越しでもちらりと見るだけでもわかるほど、大惨事である。

逆にこちらは衝撃波を追い風に更に

スピードアップしていく。

「きゃっ!?!」

「ちよっ、なによこれえええ!?!」

「待ちなさいマスターちゃん!!」

「……あと、この水着の感想を言いなさい!!」

「ああ……。安珍様が遠ざかってしまいます……。」

何やら聴こえてほしくないぞつとするようなつぶやきも耳に入ってしまったがそこは無視である。

アーラシユも早々に宝具を撃って退場してくれたし、

これで楽に

『……ステラアアアアアアアアアア!!』

「——えっ?」

前を見ると、膝をついていたはずの彼が

いつの間にか立ち上がっており、

ありえない二発目の宝具を放ってきていた。

なんで、ちよ、死ぬ——。

まさか連発されるとは思っていなかったの

直撃コースを避けられず、不意に固まってしま

俺の後ろから、とある二人組が乗っている

サイドカー付きのバイクが追い越していく。

「——令呪をもって命ずる!!宝具を

解放せよ!!シールダー!!」

「——『今は遠き理想の城』!!」

巨大な白亜の城が姿を現わし、ステラを

防いだ。

「——増田君に手を出すとか、死にたいの？」

死にたいのかな？」

「先輩!!大丈夫ですか!?!」

敵同士だというのに、俺を救ってくれたのは

立香とマシユのコンビだった。

いつものサイドテールをツインテールにし、

スクール水着と黒タイツを履いている

立香の姿に鼻血が出そうになるのを鼻を

抑えながら返事をする。

「お、おお!!あんがと!!・・・でも、なんで?!」

「・・・増田君!!一つ言い忘れていたことが

あつた!!」

「え?」

「私、君のことが大好きだから——!!」

「あ、私もです!!」

「……………」

——今度こそ、頭が真っ白になった。

『……………』

『おい……………。おい。』

屋台で焼きそばを作って売っていたクーフリーンは会場が一気に静かになったのを見て、つぶやいた。

実況もあれだけ熱烈にしていたイシュタルが

今は真顔である。

無理もなかった。

——まさか、立香とマシユのペアが増田を

助けたと思ったら、いきなり告白である。

きゃー、と顔を真赤にしながらぶんぶんと

首を横に振って身をくねらせる立香の姿が

会場のモニターに映っていた。

『ついに言っちゃったー!!恥ずかしいいいいい!!』

あ、でもこれで何も気にすることもなく

毎日誘惑を……………』

『マスター!!ハンドドル!!ハンドドル握ってください!!
きやああああ?!』

自分の両頬を両手で抑え、ぐるぐるうずまく目で
顔からぷしゅー、と熱気を出す立香にマシユが叫ぶ。

『おい!?マスター!?マスター!!放心する

のはわかるがしつかりと運転しろ!!蛇行しているぞ!!』

『……え?ああ、うん。へーきへーき。

そろそろVRマシ○の続編出るんでしょ?聴いてる聴いてる。』

『何の話だね?!』

『アルテミスううう!!ノリで俺も言っておくぞおおお!!』

なんだかんだおまえが大好きだあああああ!!』

『いやーん♡ダーリンステキー♡』

あちらこちらでスイーツ○な雰囲気の流れる中、

後続のマシンに乗っている女性サーヴァント達からは

瘴気と勘違いするほどの黒いオーラが放たれていた。

『こらああああああ!!私のオルタといちゃいちゃ

するばかりでなく!!立香ともラブラブして

沖田さんをのけ者にするなんてええええ!!

今なら無明三十段突きで許してあげますから

待ちなさいーい!!!

『マスター。私もマスターが好きだぞ。

子供が欲しい。優勝したらたつぷりと

私の中に子種を・・・』

『マスター!!!先日私とナイチンゲールの

水着姿を楽しみにしているといっただのは嘘だったのですか?!

おっぱいが好きなら、私のを好きにしていから、

私の傍を離れないでください!!私の事を、

好きだと言ってくれたではないですか!!!

愛していると言ってくれたではないですか!!!』

『・・・マスターは、頭の病気にかかっているだけです。

ええ、そうです。恋は一時のはしかと同じ物。

だって、私のような女の水着姿が見たいと、そんな風に

私をオンナとして見てくれるあなたが、そんなはずがない。

だからそれも病気なのです。・・・そうに決まっている・・・。

．．．だから、救わなくては．．．。』

「ふはははははは!!我、愉悦!!」

「お前なあ．．．。」

A U Oと書かれた白Tシャツに、金色の海パンを履いている
ギルガメツシュが上機嫌でやきそばをもつしやもつしやと
食べながら、高笑いをする。

「．．．高貴な英雄王様がこんなもん食っついて

いいのかよ?」

「はっ!!目の前に最高の味付けなるものがあるのだ!!」

我の舌は満足しておるわ!!．．．にしても、あの

女がな．．．。」

「あ?．．．ああ。」

ギルガメツシュの視線の先には、ぷるぷると体を

小刻みに動かし、額に青筋を浮かべながらもなんとか

実況をしようとしているイシュタルの姿があつた。

全てを望むまま与えられ、何一つ不自由なく、

多くの愛人に囲まれて生きてきたあのイシュタルが、

今は「ずっと手に入らないたった一つの宝」のため、

何とか手に入れようと足掻いているその姿が、

ギルガメッシュにとっては口角をあげさせる出来事であった。

「フハハハハ!!ねえ、どんな気持ち!?!どんな気持ちと

いってやりたいところである!!」

「悪趣味すぎんだろ……。」

「ねえ、ギル。この「かきごおり」って言うの食べてみたいんだけど……。」

「おお!!いいぞ!!宝物庫を解放してやろう!!フハハハハ!!」

そんなやりとりがされていたとかなんとか。

そして、増田達はというと――。

「ん……。」

「あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡」

(……あれ?これは、夢?)

――マシユと、立香に襲われ、逆レイプされていた。

どうしたこうなったのか、時は遡る。

サマーヒート・デツドレース!!イシユタル・カップⅡ!!
スクール水着黒ニーソの立香とエロエロとくその3

アーラシユ平原を抜け、夜に差し掛かった。

今回のレースは以前と同じく、コースごとに順位を争う形式である。

そこで、ポイント割り当て、一番多くのポイントを得たチームの勝ち、となっている。

アーラシユ平原を一位で抜けたのは俺たち『難波船』。

二位は立香とマシユの『正当派ヒロインズ』である。

一位、この名前は何に対する当てつけなのだろうか。

レースでは敵同士だが、今は休憩時間。

昼に助けてもらったお礼も兼ねて、人の少ないところに

ある休憩ポイントの木の小屋で俺たちは夕食を摂っていた。

もちろん、料理はエミヤンお手製である。

腹いっぱい食べて、自分に割り当てられた部屋に行こうとすると

何やら下の階が騒がしいことに気が付く。

そつと首だけ階段から出して下を覗いてみると

そこには多くの女性サーヴァント達がひしめき合っていた。

それを抑え込む、ピッチピチのボディーガード服を着た

呂布とアステリオスことアーくん。そしてヘラクレスの姿があった。

「ちよつと!!そこ通しなさいよ!!マスターちゃんが

ここにいてるってわかってるんだから!!」

「そうだぞ。メイドたるもの夜の世話をしなければ、

ご主人様に対して合わせる顔がないというものだ。」

「ふふん!!マスターよ!!恥ずかしながら余の前に

出てくるがいい!!マスターの好きなツイントールの

髪型にしているぞ!!惚れ直すが良い!!」

「マスター!!沖田さんが会いに来ましたよー!!」

マスター?なんで出てこないんですか?・・・もしかして、

オルタの方がいいとか抜かすんじゃない?」

「マスター。10位以内に入ったぞ。だっこしてくれ。」

「」

カオスである。

(.....どう考えてもあの件だよなあ.....)

そう、アーラシユ平原を走っていた時に起きた出来事。

通称、『立香の愛の告白事件』である。

あの一件が映像に残っていたことを知った立香は

大分取り乱し、一時はレースを抜け出して他の場所に

レイシフトしようとしていたのをマシユやオリオンたちで

何とか止めたところである。

それからしばらく彼女を真赤にしながらうーうー

うなっていたが、肝が据わったのか今、大胆なことを

してきていた。

「うえへへへ.....♡」

—— スク水に黒ニーソという格好のまま俺の背中に

ぴつとりとくつついているのである。

どうやらシャワーを浴びて、新しいスク水に着替えたのか

柔らかいし、いい匂いが漂ってくるし、隙あらば

耳元でささやいてくるし、あああああああああ

「マスター!!しっかりしろ!!マスター!!」

「.....はっ!!」

いつの間にか横にいたエミヤんの声で目を覚ます。

そうだ、とりあえず寝よう。うん、疲れているだけ、

疲れているだけ。

自分の部屋に入って、ベッドにもたれかかる。

しがみついて離れない立香を無視してとりあえず

枕に頭を乗つける。

「ねえねえ。」

「.....」

立香何やら話しかけてきているが無視である。

とりあえず、今日は押しかけてきている女性サーヴァント達と

鉢合わないように部屋にこもっていなければどんなことを

されるかわかったものではない。

さっさと寝て、明日に備えるに限る。

「ねーってばー。」

「.....」

彼女がそれでもあきらめずに話しかけてくるが、それでも無言を貫き、目を閉じる。

段々と心地よい眠気が体中にいきわたり、ウトウトとしてきた。

ようやくと長い一日が終わる。

そう思っていた矢先、履いていたズボンをいきなり誰かにズリ降ろされる。

と言つても、そんなことができるのは同じ部屋にいる彼女しかいないわけで……。

「おい、立香？何して……。」

「……お願い。」

彼女の方を向いて、俺は絶句した。

———そんなことがあつても泣かない彼女が涙を流しているのである。

これにはさすがに二の句が継げず、

無言になってしまう。

「私ってそんなに魅力ない？……お願い。」

今日だけでいいから……都合の良い
女で居させて……。」

「……立香……。」

俺は、心のどこかでまだ昼間の出来事が
夢であると思っていたようだ。

彼女は、俺のことを好きだと言ってくれた。

俺は、彼女みたいな可愛くて優しい子が
好きだ。

でも、ホントのところ、それでもまだ

信じられなかった。

女子からモテたことのない俺が、

よりにもよってこんなかわいい子に

想われるなんて——。

「ん……。」

「り、立香……?」

「横になって……。こうやって……。」

「おおっ……!」

射精が終わるころには、ハイライトが消えた目で彼女が顔や口から俺の精子を垂らしながらぼうつとベッドで横になって寝転がる。

「・・・ひう・・・♡」

「・・・。」

彼女の身体を見ると、下の方がじんわりと黒く濡れていることに気が付く。指で布の上から押すと、びくつ、びくつと彼女が反応して絶叫する。

「あおおおっ♡おおおっ♡」

「・・・。」

枕を後ろ手に抱えながら身体をエビぞりにしてもだえるその姿に理性の意図がぶつんと切れ、最後の一線を自ら超えてしまう。

「・・・くそっ!!なんてエロいっ・・・!!」

「こんなの、耐え切れるかよっ・・・!!」

「・・・あひい・・・あ・・・♡」

スクール水着を指で横にずらし、ペニスの亀頭を押し当てる。

割れ目を少し突つついた程度であるが、それでも彼女と俺にとっては腰砕けになるほどの衝撃であつた。

たまらずに彼女に覆いかぶさると、

両腕を背中に回し、足で腰をホールドしながら彼女が懇願してくる。

「はやくうつ♡入れてえつ♡おちんちんで

ずぼずぼしてえつ♡」

「・・・!!」

「あうううううつ♡きたああつ♡」

初めての相手であるからゆっくり体を動かした方がいいのではないか。いや、どうすればいいかわからないしとりあえず少し動かないでいた方がいいのではないか。

そんな考えはすべて吹っ飛び、気が付けば

力の限り腰を突きだし、彼女を犯していた。

がくがくと痙攣しながらも必死に俺にしがみついてくる
彼女をぎゅつと抱き返し、腰の動きを止める。

体の奥底から精子がすべて出ていく感覚を感じながら
彼女の中で果てた。

1分、2分、そして数分間つながったまま

抱きしめあつていると、ドロドロに精子で汚れた

顔で彼女がにこり、と笑った。

何かを口の中に放り込まれ、それを飲み込んでしまう。

「!?!何を．．．!?!」

身体が熱く燃えるようにたぎり、目の前が

かすんできた。

理性が焼き付き、意識がもうろうとしてくる。

「えへへ．．．。本当は持ってきちゃいけないんだけど、

魔術礼装の『愛の秘薬』、持ってきちゃった．．．。♡」

「．．．り．．．か．．．。」

「．．．．今日は、一晩中、まぐわろ?♡」

何度出しても出しても満足しない彼女に

搾り取られ続け、シャワールームに入る時も

搾られ、ようやく解放されたのは次の日の朝3時だった。

おまけ

くアア：：：♡イイツ：：：♡モット：：：♡モットオチンチンデハメハメシテエツ：

♡

くウア：：：、リツカ：：モウ：：デナイ：：：。タスケテ：：。タスケ

『：：：：：。』

→増田と立香のまぐわる声が

全聴こえて真顔の女性サーヴァント達。

「WWWWWWWWWW」

「WWWWWWWW」

「クWWWツWWWツソWWWワWWW口WWWタWWW」

→大爆笑のギルとメツフィーと黒ひー

「：：：：：。」

「：：：：：。」

「：：：：：。」

□ □ □ □ □

→ガチギレしているアルトリア（アーチャー）とアルトリア（ランサー）、
モードレッドを見て、恐怖に震える円卓の騎士たち。

「あいつ……。明日のレース前に死ぬんじゃねえか？」

「それは、女性に刺されてか？ 搾り殺されてか？」

「いや、そのりようほ……。おい、なんでお前

そんなに死にそうなんだ……。？」

「……。聴くな。」

サマーヒート・デッドレース!!イシュタル・カップⅡ!!
暴走!!妄想!!追走シユラバンバ!!くその4

『さあ!!始まった第二レース!!昨日と同じく、スタートラインに

参加者が全員そろっている状態となり、圧巻の状態よ!!』

『わあああああああ!!』

レース二日目。

アーラシユ平原という非道極まりない地帯を潜り抜け、

俺たちは一位となり、そうして今、二日目のレースに

参加しようとしていた。

が

『.....』

□

□

□

ミシミシイ、と胃がつぶれるかと思うほどの
プレッシャーを背中を感じながら、同じ

チームメイトであるオリオンとエミヤんに

ひそひそと話しかける。

「なあ、2人とも。心なしか女性サーヴァント達の

俺を見る目が怖いんだけど……。ハイライトないし……。」

「……………気のせいだ。」

「そうだぞ。アルテミスも良くハイライト落としているから

ふつうふつう。」

コンタクトみたいに落とせるものなのか……?と

疑問は尽きないが、そこはスルーしておいた。

とりあえず、昨日のことについて聴いてみる。

「そういえば。昨日の夜の夜の記憶がなくなつて、朝起きたら

身体がミイラみたいにならつたからだったんだけど

何か知っているか？」

「……………」

「……………」

俺の質問に対して、黙って首を横に振るエミヤんと
十字架を神父のように切るオリオンの二人に首を
傾げながらも、マシンに乗り込み、レースに
備えることにした。

ハンドルを握って正面を向いて気合を入れていると
こんこん、とドアがノックされる。

「や、やつほー・・・。」
「」

横を見ると、サイドカーに乗った赤色のチャイナ服の
立香と、死んだ目つきでその横に乗っている

白いビキニ姿のマシユがいた。

「きよ、今日はいいい天気だね!」

「お、おお?」

ふんす、とそういう立香に若干たじろぎながらも

用件を聞くことにした。

「どうした?何かあったのか?」

「え?えーと、えーと・・・。」

『それじゃあ!!皆位置についてー!!』

そろそろ始めるわよー!!』

「お、そろそろ時間か。．．．ほら。

そろそろ行つたほうがいいぞ。」

「う、うん。．．．あのね。また、あとでね．．．?」

「ああ。」

自分の開始位置に戻っていく立香たち。

それにしても一体何を言おうとしていたのだろうか。

昨日の記憶もほとんどないので、自分がレースに勝っているのかさえ、

よくわからない状況である。

何というか、一晩寝て起きたらぐっすり記憶がなくなっていたというか．．．。

(ま、考えてもしょうがないな。)

『女難破号』のアクセルを踏んで、スタートラインまで

進める。

「．．．．．。」

「．．．．．。」

「．．．．．。」

「.....」

——その右隣では、よく見る顔である

アルトリアのランサーとモードレッドが乗っている

魔改造された2台のバイクが。

左隣にはナイチンゲールとアルトリアランサーの

オルタが乗っている救急車が俺たちを囲む。

そろそろレースが始まるというのに両チームとも

前を見ずに、俺たちを凝視してくる。

「」

彼女たちにトラウマでもあるのか両手で自分の

腕を抱きしめ、がくがくと震えるエミヤんとオリオン。

彼女たちの背後には般若が見えていた。

震えそうになる声を押し殺し、とりあえず

彼女たちに声をかける。

「よ、よ、よ。」

「……ろす。……さねえ。……れのことを見捨てるなんて……。」

「マスター。マスターマスターマスター。」

マスターマスターマスターマスター。」

「

右隣にいるモードレッド達が何やら呪詛のようにぶつぶつとつぶやいていた。

触れたら不味い気がしたので、今度は助手席に移動して、反対側にいるナイチンゲールたちに声をかけようとしてみる。

「……まずは、タイヤを突き刺してスピン。

他の邪魔な二人を”ロンゴミニアド”し、このレース場を脱出し、無人島にレイシフト。

それから……。」

「司令官。あなたの病気は私が治してみせます。

……私を病気にした責任を取らないなど、

絶対に許しません……。」

」

無言で開けた窓を閉じて、ふう、と息を吐いて落ち着く。

どうやら幻覚を見ているらしい。

いつも俺に対してそっけない彼女たちがこんな

感情的になるなどありえない。

だからこれは、見間違いだ。そうだ。そうに決まっている。

『……それじゃあ!!カウントダウン、行くわよー!!』

——イシュタルの声に應えるように、歓声で大気が震えた。



「……なあ、あれ、どう思う?」

「……たぶん死ぬな、ありや……。」

屋台で買ってきたもちしをかじりながら、

観客席に座ってモニターを眺めるロビンと

クー・フリー・リン。

モニターには、女性サーヴァント達の

マシンに囲まれ、何が何だか分からないと
動揺する増田の姿が映っていた。

あそこにいるのが俺じゃなくて、

あのアーチャーでよかった。

2人は全く同じことを思っていた。

「……マスターが女どもに

逆レされるのにー万。」

「どっちも同じ方に賭けるから

賭けになんねーだろ……。」

『——第二レース!!スタート!!』

イシユタルの合図とともに一斉に走り出す

参加者たち。

増田も早速前に進もうとしたその瞬間

——いきなり、『女難波号』の姿が消えた。

サマーヒート・デッドレース!!イシュタル・カップⅡ!!
墜ちろ!!・・・落ちたな(確信) ~その5

(何だかイラツと来た。増田君を後で誘惑しなきゃ。)

「先輩?」

「ああ。嫌、何でもないよ。うん。」

第二レース。

波乱の幕開けによって始まったその争いは

今までにないほどの混迷を極めていた。

『増田率いる女難波号がいきなり行方不明になるという

アクシデントがあったけれども!!けれども!!

気を取り直して実況していくわよー!!さあ!!

オツズが一番高かった女難波号が消えて、代わりに

トップに躍り出たのはー!!』

「どけどけどけどけー!!一位は余の

ものだああ!!」

「お手伝いさんを舐めるなアアア!!」

『復刻ガチャでも大人気の二人組!!』

アルトリア・オルタと!!ネロの二人!!

一体、こいつらに貢いだ男は何人いるのか?!』

10万出しても出ない人がいる2017水着組の

ネロとオルタが去年よりまがまがしく

魔改造されたマシンに乗り、先頭を突っ走って行く。

「マスターはどこに行ったのだ!?昨夜の件について

問い詰めてやろうと思ったのに・・・!!くうう!!

余は、伴侶が寝取られるなど絶対に反対だからな!!」

「貴様の妄言は置いておくとして、昨夜の件に関しては

絶許。なぜ、専用のメイドである私にはお手つきしない

のだ・・・!!」

(こええ・・・。)

会場にいる男性がドン引きするようなことを叫びながらも

2人はマスターの事を心配・・・心配?していた。

決して中に出されている立香が羨ましいとか、

こっそり使われずに貯蔵されている聖杯を使つて

受肉し、妊娠しようとか考えていない。

決して。

後続のマシンを振り切り、太陽に向かつて

突つ走る二人と、その後ろから続く

他のサーヴァント達。

そして、大きな橋がかかっている谷へと

差し掛かり、その上を通つていく。

「橋・・・墜落・・・。うっ、頭が。」

「マスターと離れるのはもう嫌だ・・・。」

マスターと離れるのはもう嫌だ・・・。」

『天井はないから!!』

去年の嫌な事件だったね・・・な記憶を引きずりながら

橋を次々と渡るために進む彼女たちを前に、

イシユタルの実況に熱がこもる。

『さあ!!ついに第二レースも大詰め!!』

T谷に掛かっているグレート・イシユタル・ブリッジを

行ったことのある者たちはそろって同じような
反応を示した。

——次に、突如橋が上に吹っ飛んだ。

「ああああああああああああ!!無理無理無理無理

無理いいいいいい!!どこまで追いかけてくるんだよ

あいつうううううううう!!!!?」

□ □

「二人ともしっかりしろおおお!!ここぞで

魔力切れとかやばいってええええええ!!」

——上に落ちていく彼女達が見たのは、特製の黒い

卑猥なビキニを着こなし、涙目で空飛ぶ

女難波号を全力で追いかけるティアマト神の姿だった。

□ □ □

『』

直接相対したことがある、マシユ、ギルガメツシユ、マーリン、
イシユタル、そしてその関係者であるエルキドゥは
開いた口が塞がらなかった。

「raaaaaaaaaaaaaaaaaaa!!（私の実装と、水着化は
まだあああああああああ!?!）」

——自分のサーヴァント化を掛け、実は参加していた
スーパリアルターエゴ、ティアマトちゃんのダイナミック
エントリーであつた。

時は遡る。

『マスター♡』

「……はえ?」

気が付いたら、俺の周りを取り囲むように
立っている、水着姿の美女、美少女の群れ。
それぞれが人間離れした美しい容姿であり、
そんな彼女たちの水着姿を見て、思わず

かがむ。それと同時に、頭の中が混乱し、

様々な考えが一気に駆け巡っていく。

(え? どういうこと!? レースは!?)

なんなのこれ!? なんで俺サーヴァント達に

囲まれているん!? というかちよ、近つ!!)

『マ・ス・ター♡』

「うぎぎぎぎぎ!!」

押し寄せる、彼女たちにおしくらまんじゅうされ、

胸や尻で体を埋め尽くされる。

体のあちこちを柔らかな感触が包み、

段々と頭がぼうつとしてくる。

(.....ばい.....意識.....が.....)

酸欠で今度こそ意識を手ばしそうになったその時、

誰かの声が聴こえてきた。

「——スター!! マスター!! 気をしっかりもて!!」

落ちているぞ!!」

「ちよつとー!?! 去年さんさんな目にあつたつていうのに

今年もえらい不幸なんですけどー!!? いやああああ!!
中の綿が出ちゃうううう!!」

目を覚まして隣を見ると、必死の形相のエミヤんとオリオンが俺の
身体を揺さぶっているのが見えた。

「あれ? おっぱいは? 安産型のお尻は? 水着パラダイスは?」

「何を言っているんだ!? 目を覚ませ!!」

「……はっ!!」

そうだった。俺達は今――。

『aaaaaa aaaaaa raaaa aaaaa aaaaa aaaaa aaaaa!!』

――特製の水着を着ているティアマトに追いかけている
所だった。

後を見ると、泣きそうな顔つきのティアマトが俺たちを

必死に追いかけてきているのが見える。

彼女の身体が赤く発光しており、それが暗い冥界を

照らしつける光ともなっていた。

周りには、ちっちゃな人型サイズのティアマトがぼこぼこ泥から生まれてきていた。

やばい。スタイル良すぎる。1人ぐらい持ち帰っても・・。

——ぞくり、と背中に嫌な寒気がしてきたので

その考えを改めた。

【幕間】 ~もし、女性サーヴァント特攻のニコポ、ナデポ
持ち転生者がやってきたら~

——俺と違って女つたらしで優秀でイケメンの男がカルデアに
やってきた件。

我がカルデアに、新たな人物がやってきた。

「青井さん。よろしければ一緒にご飯を・・・。」

「青井!!」

「青井——!!」

「はははは。」

長身、イケメン、高学歴の三高とかどうしろって
いうんだ、と思う間もなくすぐに彼は

カルデアに馴染み、女性サーヴァント達から

人気が存在となった。

別に女性サーヴァント達と付き合っている

わけでもないし、そうなる可能性もゼロなのだから

俺が口を挟む資格もないし……。

とはいっても、職場にいる女性が全員こうもあつさりとなびくとは、やはり人間は外見だな！（確信）

NTTR食らった男ってこんな口の中が濁くものなんだな、と

感慨に浸っていると、彼が近寄ってくる。

「ああ。どうも、増田さん。」

「……うす。」

明らかに勝ち誇った笑みを浮かべている。

ぐぎぎぎ……悔しいのう、悔しいのう、と

はだしのゲンの真似を心の中でしていると、

俺の隣を彼の取り巻きと化したサーヴァント達が

通っていく。

その誰もが、俺に視線を送ることもなく、

あつさり通り過ぎていった。

（……いつものこと。いつものこと。）

バイトしていた時に、職場の女の子に

『クリスマス空いてる？』と言われて

ワンチャンあるか? と思つたら『彼氏とデートしたいから代わりにシフト入ってくれない?』とお願い(強制)された時と同じである。

別に胸はいたくないし、涙も流してはいない。吐き気もしないし、手も震えてはいない。

て、あれ——?

(あ、やばい。そういえば最近何も食べて——。)

いつも料理を作ってくれていたサーヴァント達が軒並み新しく来た男の方につきつきりで

まともなものを食べていなかったことを思い出す。

ふらつく体を支えようと足を踏ん張らせても

意識が暗転していくのを止められなかった。



—— 前回は失敗した。

でも、今度はうまくいく。いや、いかせてみせる。

魔女が空を飛ぶ世界では、女たちを自分のものに

できず、あと一步のところで洗脳が解けてしまった。

あの変人コスプレイヤーの魔の手から俺は彼女たちを救おうとしただけなのに。

だが、神様も粋な計らいをしてくださった。

「余は、奏者と一緒に——」

「マスター。その……。おいしいものが

食べられる場所を見つけたので、一緒にレイシフトを……。」

『マスター』

『マスター』

ほら、こんなにかわいい女子達が俺の

物になっている。

まだ手を出してはいないが、今夜あたり

まとめて抱くつもりだ。

前世では童貞のまま人生を終えてしまったから

今度こそは捨ててやる。

(F G Oの世界に来れたとかw w wぶつはあーーw w w

しかも男のサーヴァントがいない状態だから

ハーレム状態だわw w w)

俺の名前は青井九図。

三度目の人生を送っている人間である。

一度目は地球にて、二度目はとある魔女と呼ばれる

女性たちが怪物と戦う世界にて。

そして、今回が三度目の正直というやつである。

二度目の人生の途中にて、もらっていたはずの

転生特典、『ニコポ、ナデポ』が没収された。

しかし、今はこうしてその力が復活し、女を

意のままに操れるようになっている。

誰の処女を奪おうか。

やはり、最初はセイバーのアルトリアか。

いや、エクストラのネロもいい。

ジャンヌやそのオルタ、沖田と魔人沖田。

ダブル槍王と3Pもいいかもしれない。

マシユも最初の相手としては申し分ない。

増田とかいう変な男に皆洗脳されていたようだが、

そんな非道を見逃せるわけもなく、俺は

彼女たちを『正気』に戻し、救った。

俺のことを好きだという正しい状態に。

(前の時もそうだったが、本当にNTRって

いいなあwwアーサイコww)

彼女たちに詰め寄られながら、

今日、誰の部屋に押し入ろうか

期待に胸を膨らませるのだった。



『やあ。』

「.....」

会いたかったような、会いたくなかったような

そんな相手。

俺をFGOの世界に転生させた張本人。

誰もがその概念を知っている存在。

「神様.....一体どうしたんですか。」

『やだなあ。そんなかしこまらなくってもいいよ。』

もっとフランクに神ちゃん、って呼んでもいいのよ?』

「最近入ってきた褐色巨乳わんに怒られそうだから
やめときます。」

『ちえー。つれないなあ・・・』

ぶー、とぶーたれる人型の白いもや。

こうして話している分にはただの白い

変な物体であるように錯覚してしまう。

だが、その正体は――。

「・・・神様。俺が転生した先、

全然女子にモテないんですが。

他の転生者達みたいにモテモテになれるよ、っていう

説明と全く違うんですが。」

『えー？火口君とか、田中君とか、

ボバ君、モール君、グリーヴァス君とか

ちゃんと前例は見せて証明したじゃないか。』

「・・・。」

やっぱり詐欺だったんだな。

そう思っていぶかしんでいると不意に

彼が悲しそうな顔をする。

『……ところだ。なぜ僕がこうして

君の前にわざわざ出てきたのかというと、

とある男の事でね……』

「……それって……。」

最近カルデアにやってきた青井という男の

事だろうか。あまり良くない雰囲気の手相手ではあるが、

神様がわざわざ出向くような相手なのだろうか。

『うん。キミが考えている相手の事。』

——あいつに転生特典を与えて、はく奪したのは僕さ。

ニコポ、ナデポって言ったらわかる？』

「……ええ。」

自己投影された、オリ主が異世界に転生するハーレム

小説にてかつて横行した『女に笑いかけたり、

その頭を撫でるだけで相手を惚れさせる』という

ご都合主義極まりない最悪の能力。

『あいつからそれを取り消したはずなのに

まだ持っていたみたいでねー。でも大丈夫、もう終わったから。』

「……。」

何が、とは聞けなかった。

聴いてはならないことだ、やめておくと

身体が震えて止まらないからである。

『じゃあ、そろそろ起きなさい。』

——ステキな”ハーレム・ライフ”が君を待っているよ?』



「……ん。」

ぱちり、と瞼を開けて、目を覚ます。

頭がまだ重く、寝足りない状態である。

けだるさに身を委ねて、再び眠ろうとすると

何だかドアの向こうから騒がしい音が

聴こえてくる。

(……なんだ?)

気になったので、ドアに耳を当てて
音を聴こうとすると、それは
聴こえてきた。

『なせ!!あやつを裏切った余に、

余に生きる資格など——!!』

『——マスター。すまない。今

貴様のためにこの首を差し出す。

——何がメイドだ。何が下僕だ——。』

『えへへ。マスター。沖田さん、

ちゃんと自分を切り刻んで

虫の息になりますから、とどめを

刺してくださいね。』

『.....』

女性サーヴァント達の悲鳴にも

思える叫び声が聴こえてきた。

各々が物騒なことを言っており、

今にも自害しそうな雰囲気である。

(……これ、って……)

その時、夢の中での出来事が

脳裏を駆け巡り、身体に悪寒が走る。

耳を当てていたドアが開き、思わず

前のめりで廊下に倒れる。

——そこにはハイライトのない目で

錯乱し、顔を歪めたり、自害しようとして

男性サーヴァント達に抑えられている

女性サーヴァント達がいる。

静かに物音を立てず、立ち上がり。

そつと自室に戻った。

——その後、メンヘラと化した彼女たちに

迫られ、死ぬほど病まれたのは別の話である。

【幕間】くもし、女性サーヴァント特攻のニコポ、ナデポ
持ち転生者がやつてきたらく後日談くこれから本当の修
羅場だ（震え声）く

あの騒動から数日たち、

少しは落ち着いたかと思われたカルデア。

やつたぜ、という間もなく目の前の

問題が俺たちに降りかかる。

即ち——。

「何をしてもよい。傷つけても、犯しても、

壊しても、殺しても……。

だから、だから、余の事を見てくれ、

余の事を考えてくれ、なんでもするから、

見捨てないでくれ……。」

「ますたあ。私、嘘をついてしまいました。

ええ。嘘を嫌う私が、嘘を・・・。

ああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああああああああ

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい

「今すぐ治療しなければ・・・ええ、患者は私です。」

まずは、手足を切り落とし、二度とマスターに危害を

加えぬよう処置を施さなければ。ええ。ええ。

私は冷静です。治療を、ちりようしななければ。

ちりようしなくつちや。」

「マスター。ごめんなさい。ごめんなさい。

私、私は駄目な後輩です。私は駄目な

サーヴァントです……。」

「

そつと修練場に集められた女性サーヴァント達を

ドア越しに覗き見るとこの世の地獄ともいふべき

修羅場がそこにあつた。

誰もが目から光を失い、謝罪や後悔の言葉を

紡いでいる。

「……あれ相手に、どうしろと?」

「坊主、腹をくくれ。」

「そつだぞ、マスター。」

「……ふん。速く行ってこい、増田。」

「ちよつ」

クー、エミヤン、ギルガメツシユ、その他男性陣に
背中を押され、修練場の中に入らされる。

中に入るとどんよりとした空気が俺の

身体を通り抜けていく。

胃が痛くなってきた。

何てステキな場所なんだ。

吐血しそう。

一步一步、彼女たちの前に歩みを進めるたびに

すがりつくような視線が集められる。

普段冷静なサーヴァント達もどこか取り乱しているのか

目を赤く泣きはらしたり、目からハイライトが消えていた。

そして、彼女達全員の顔が見えるように

用意された黒い壇上にあがり見下ろす。

相も変わらずの景色であった。

何を言えばいいのか。

何を言うべきなのか。

「マスター。」

「ますたあ。」

「ごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいい

ごめんなさいいごめんなさいいごめんなさいい。」

皆、混乱している。

俺だつてそうだ。今も頭が真つ白で

何を言えればいいかなんてわかりやしない。

「えへへへへへ。」

「……マスターに殺してもらわなきゃ。」

「……う、うううう。」

自分の世界に入つてしまつている

彼女たちの姿を見て俺は——。

「……ふざけんな。」

思わずそうつぶやいていた。

びくり、と俺のつぶやきが聴こえたのか

身体を跳ねさせて反応する彼女たちに

お構いなしにそのまま言いたいことを言つていく。

「ふざけんな!!ばーかばーか!!」

俺の気も知らないで、死ぬとか、

殺してとか!!」

駄目だ。

感情を抑えきれずに、どんどん言葉が

出て行ってしまう。

「あのなあ!!終わったことをいつまでも

言ってるじゃねーよ!!そら悲しかったわ!!

辛かったわ!!嫌だったわ!!」

俺の本音を聴いて、さらに泣きそうな顔に

なる彼女たち。

それがまた、俺の眉間にしわを寄せさせる。

「でもなあ!!もういいんだよ!!」

あいつのせいであって、お前らのせいじゃない!!

良いか!!!良く聴け!!!——俺は、お前らが好きだ!!!」

——ああ、言っちゃまった。

あんだだけ恋愛にはもう関わらないって言ったのに。

NTR食らったり、フラれたり、二股かけられたりして、もう誰も好きにならない、女には仕事以外で近寄らないって決めていたのに。

「お前らが俺をどう思っているかは知らん!!」

わからん!!今でもさっぱりだ!!でもなあ!!

俺はお前らが好きだ!!!夜ムラムラしているときは

おかずにしそうになったりもしていたし、

いつも近くにいるときは心臓がバクバク鳴ってたわ!!」

顔を真赤にして、きゃー!!とか、うわー!!とか悲鳴が

あがるが知らん。

ここまで行ったら突っ走っちゃおう。

「俺は!!お前らが好きだああああああ!!」

いつまでもくよくよしてんじやねえええええ!!」

◆

「

あー。」

「。。。。。。。」

「ふはははははは!!ふははははははははは!!」

後頭部に手をやってぼりぼりと頭を搔くクー。

やればできるではないか、といった顔つきで

両腕を組んで頷くエミヤン。

笑い袋みたいにさつきから笑いつぱなしで

ぶつ壊れたギルガメッシュ。

その他大勢の男性サーヴァント達に

近づかれ『良く言った!!』、とか

『男だな!!お前!!』という風にはしばしと

背中を叩かれたりした。

今思い出しても顔から火が出そうなほどに

恥ずかしいことを言ってしまった気がする。

「とりあえず、あれから数日たったけどよ、

皆元通りに戻ったみたいでよかったじゃねーか。」

「ああ。あれだけ食欲のなかったアルトリアたちも

今ではそれまでの倍近くおかわりしてエンゲル係数が

崩壊して、なんでさああああ!!」

「む、壊れたか。友から聞いた話では斜め四十五度にチョップして・・・。」

とりあえず、疲れた。

皆が落ち着いてくれたのはいいが、

また別の問題が残っている。

「———ところだ。増田。」

「・・・何?」

「貴様の本命は誰だ?」

「」

「『・・・・・・・・・・・・・・・・』」

———俺が食堂にいと絶対に同じ時間に

いる彼女たちが聞き耳を立てながら

獣欲にまみれた眼光を向けてくる。

俺の告白まがいの叫びを聴いてから

彼女たちから一切の遠慮が消えていた。

今はこうして男同士で和気あいあいと

話ながら食べているから良いモノの、

普段は誰が俺の隣に座るかとか、
もしくは膝の上に乗つかるとか、
食べさせるとかで争いが勃発する。

「……………」

とりあえず無言で食堂から抜け出す。

すると、彼女たちもガタガタガタツと席を

立ち、俺の後ろをついてきたり、気が付いたら

おぶさっていたりする。

—— 歩くために動かしていた足はいつの間にか

ランニング・フォームの構えを取り、マラソン

選手張りの走りへと昇華していった。

夜這いも日々ひどくなっていくし、もうこれわかんねえな。

とりあえず、死ぬ前に童貞だけはどっかで捨ててこよう。

彼女たちに捕まって、ずるずるとどこかの部屋に

連れ込まれ、愛情を注がれながらぼうつとした

頭でそんなことを考えていた。

メリー苦しみます(白目)くプレゼントはお前だくその1

12月25日。

恋人たちが愛し合う、クリスマスの日。

とあるカルデアにて、マスター、増田は頭を抱えてベッドに寝ていた。

「あああああ……!!女子といちやつきたいいいいい!!!」

彼の抱き枕となっているフォウ君は「こいつ、どうしようもねえな。

マーリンシスベシ、フォーウ」とつぶやく。

うっ、うっ、と少し涙を流しながら、崩れた顔がさらに崩れて、

何とも言えない顔つきとなっていた。

彼、増田は童貞である。

好きになつた女の子は星の数。

しかし、成就した数はゼロ。

本命には振られ、小学校の子供にさえ相手にされない、

恋愛くそ雑魚ナメクジ。

カルデアにて、見た目と中身が素晴らしい女性たちに囲まれても、どうせ、俺なんて・・・とぐずる面倒臭さ。

しかし、仕事はまじめにやり、投げやり気味だが女子とも気楽に、コミュニケーションをとり、サーヴァントたちに支えられ、また、支えとなつている彼は、実は並々ならぬ数の女性たちに想われていた。もちろん、当人はそんなことを知る由もなく、

一人、ベッドにてさざめなく。

「うっ、うっ・・・。俺もモテたいよお・・・。フオウ君・・・。」

また、振られるのは嫌なんだよお・・・。」

「フオウフオウ（婚活すれば？）」

「俺じゃ無理でしょ・・・。ああ、サンタさん、俺に可愛い彼女をくれ・・・。」
ついにサンタ頼みになったチキンに、奇跡が舞い降りる。

「———フアラオである!!!」

「フハハハハハハ!!!」

———なんか、めちやくちやめんどくさい黄金と、太陽のコンビが、スフィックスが引くソリに乗ってやってきた。

もちろん、部屋の壁を突き抜け、堂々たる侵入である。

「貴様、我がマスターともあるうものが伴侶がいなくらいで泣きおって!!」

「あんた、嫁さんもちだろが!!・・・リア充の言葉など聞きたくない!!」

「雑種よ。別に童貞だろうと関係ないであろう。・・・童貞!!で!!」

「あろうと!!」

「強調するなあああああ!!ギルギルウウウウ!!」

美人で気立てのいい奥さん持ちの勝ち組と、

人類最古のプレイボーイでもある金ぴかの二人によつて、

さらなる精神的ダメージを負った増田は布団を頭からかぶり、

聴かざるとなる。

「ううう・・・!!くそっ・・・!!俺だつて努力したよ・・・!!」

デートの店抑えたりとか・・・、イルミネーションがきれいな場所探したりとか・・・!!

見た目に気を使つたりとか・・・!!でも・・・!!でも・・・!!

一回目のデートにすらたどり着けないんだよおお!!」

それまでかろうじて押さえていた感情を彼は爆発させ、

フオウ君をぎゆうううつと抱きしめて、深呼吸する。

「ああ・・・。もう、フオウ君がいれば俺にはほかに何もいらぬ・・・。」

「フオウフオウ（うれしいこと言ってくれるじゃないか、娑婆増。」

「・・・まつ、もうちよつといい男になったら考えてやるよ。」

ケモナーに落ちかけていた彼の枕元に、二人はそつとあるものを置いた。

「・・・？なんだこれ？」

「フハハハハハ!!むせび泣いて喜ぶがいい雑種!!メリー苦しみます!!」

「ハハハハハハ!!・・・そろそろ初日の出を準備させねば。」

相変わらずうるさい二人は、うるさい笑い声をあげつつ、

部屋の外に出て行った。

マスタがその紙切れらしきものを手に取る。

「・・・」カルデア、特別ガールズバー「・・・?・・・!!?」



「き、来てしまった・・・。」

チケットの裏側に書かれている地図を頼りに、

カルデアから少し離れた、怪しい山小屋にやってきた増田。

外は吹雪が吹き荒れる山岳であり、そこから移動するのも一苦労であった。

こんな場所にガールズバーなんてあるわけがない。

しかし、しかしだが、黒ひげとかあたりがもしかしたら、

開いているかもしれない。

ダヴィンチちゃんあたりが、ふざけてクリスマスパーティーの催しを、こつそりやっついていて、あの二人にチケットを渡させたのかもしれない。

一人でクリスマスを過ごすくらいなら、騙されてもいい。

そう思った彼は部屋を飛び出し、確かめにやってきた次第である。

なので、クーパーリンや、ロビンフッドなどの男性サーヴァントが同行し、

彼を目的地まで届けることとなった。

「みんな、あんがとな。．．．おみやげ持って帰るわ。」

「気にすんなよ、坊主。．．．逝ってこい。」

「ああ。大将。．．．逝ってきな。」

(．．．何か、文字がおかしかったような。)

みんなからなぜか、生きて帰って来いよ、みたいな視線を感じたが、

無視して小屋のドアノブに手を掛ける。

ノブを回してドアを引き、中に入ると真っ暗だった。

(．．．うえ、さむさむ．．．。)

持ってきたスマホの明かりで中を照らすと、さらに奥のほうに続いているようだった。

部屋の正面は洞窟みたいに穴が空いており、先に進むことができる。

恐る恐る一歩、一歩を踏み出して歩いていく。

はあ、と漏れた息が白く染まり、ぶるぶると体が思わず震えた。

カンテラも持ってきてはいたので、スマホをしまい、

代わりにカンテラを灯して、明かり代わりにすることにした。

先ほどよりもはつきりの中がみえる。

自然の洞穴かと思っていたが、やけに人が歩きやすいように整備されているような気もした。

（……お、なんか明かりが……。）

奥のほうまで来ると、なんだか一つの扉が見える。

扉の周りからは明かりが漏れている。

駆け寄って、扉のドアノブを引っ張る。

「「「「「メリー・クリスマス!!!」」」」

「」

———なんか、よく見る顔ぶれがサンタガールの格好をして、

クラツカーを鳴らしていた。



「・・・え？これ、ぐだ子とマシユの提案なの？」

「うん。・・・ほら。毎年何かにまきこまれていたでしょ？、

だから、今年のクリスマスくらいは、ね？」

「はい。・・・ご迷惑、でしたか？」

「いやいやいやいやいやいやいや!!」

「あんがと!!・・・あんがと!!」

周りに視線を送ると、そこは天国であつた。

様々なタイプのサンタガールのコスプレをした、

絶世の美女、美少女たちが酒やジュースを片手に談笑している。

部屋の中はとてつもなく広く、

カルデアの修練場よりも大きいのではないかと思うほどであつた。

せっかくなので、気になったことも聞いてみることにした。

「ちなみに、なんでカルデアの中でやらないん？」

「あー。それは・・・。」

「ふふん。それは私の提案さ。」

「あ、ダヴィンチちゃん。」

どや顔でドンペリ片手に出来上がってるダヴィンチちゃんが、

ふらふらとした足取りで近寄ってきて、

しなだれかかって・・・ほわあああつ?!

「ダ、ダヴィンチちゃん!?!ちよつ、まづいですよ!?!」

「・・・女性陣だけで、楽しめるように、

カルデアじゃなく、こつそりとここに拠点を作つて・・・zzzz」

「はいはい。向こうのソファアで寝ようねー。」

「よいしょつと。」

正面から抱き着いてきた彼女は寝てしまい、

それをブーディカとメデューサが介抱して、

近くのソファアまで運んで行った。

「つまりですね。たまには女子だけの女子会とやろう、つて話になりました。」

「うん。・・・男子は男子だけで楽しんでいるはずだよ。」

「なるほど。」

前世で会社勤めしているときとかも、確かに男女でぎくしゃくすることが何度かあつ

やばいやばいやばいやばいやばい・・・！
女子がこんな近くに・・・！！

（……………計画通り。）

女子が近くにおいてどぎまぎしている俺は気が付かなかった。
これからが、本当のクリスマスパーティー・・・。
あの二人が言った通り、メリー苦しますになるなんて。

メリー苦しみます（白目）くプレゼントは俺だった……
？くその2

「じんぐるべーる!!じんぐるべーる!!こ・し・を・ふ・る!!」

今日は!!たのちい!!クリスマス!!」

「「「「HEY!!」」」」

グラスに入った酒を右手に掲げ、

腰をカクカクと降って下ネタを言う。

酒が旨い、旨すぎる。

手を止めることなく、体の中に注がれていく。

女子と、それも美人とちゃんと飲むとこんなにおいしくなるなんて、

知らなかったです、まる。アーム!!!

酒もってこい!!酒だ!!アパー○!!!

しかし、さすがに飲みすぎたのか、

気が付いたらソファアに背中を預け、

天井を見上げていた。

体内に入ったアルコールが体中に回ったようで、

世界も回って見えている。

あ、美人がひとり、美人がふたり……。

ぐでー、と体をソファーにもたれかかっていると、

近くに彼女達が近寄ってくる。

「せ、せんぱい、大丈夫ですか？」

「すごい飲んでるもんね、増田君……。」

ストレス抱えてたのかな……。」

「らいじょーぶらいじょーぶ。へーきへーき。

……回るよ世界。世界が回る。

今の俺だったら、なんでも、できる!!」

横に座ってきた立香とマシユの二人の手を取って、

笑いながら叫ぶ。

今の俺だったら、なんだってできそうだ。

なんだったら、ボックスガチャを1000箱開けるのだって不可能ではない。

「ん？今、何でもできるって言ったよね？」

「……え。」

それまで、騒がしくもあたたかな雰囲気にも包まれていた部屋の温度が急に下がったよ
うな気がした。

体に回っていたアルコールが抜けたのか頭が冴えてくる。

彼女たちの目を見た。見てしまった。

——獲物を前にした、どう猛な肉食動物のように、

その目がギラギラと輝いている。

さあ、と顔が青くなつたのか、寒気を感じぶるりと身震いする。

暖房がついていて、暖かいのである。

「……あつ、そうだ。俺、」野郎だらけの枕投げ大会にエントリーしてるんだつた。

シード枠だから、早く帰らなくっちゃ。」

ソファアから身を起こして、立ち上がろうと足に力を入れる。

ぼすん、とまたソファアに座ってしまふ。

手が横にいる二人につかまれ、磔にされたように動かない。

華奢で、細くてかわいらしい腕のどこにそんな力があるというのか。

「あの……。マ、マシユ……。？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

いつもやさしい笑みを向けてくれている後輩はそこにはいなかった。

——にちゃあ、という音が鳴っていきそう、ねつとりとした笑みをマシユが浮かべていたからだ。

「ひつ、り、立香・・・!?!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・増田君。」

いつも元気で、明るい彼女の表情を察することはできない。

——貞子のように、顔を下に俯かせながらも、決して俺の手をつかむ手から力を緩めない立香の姿に、身を縮こまらせる。

「あ・・・ああ・・・・・・・・。だ、だれか・・・・・・・・。助けて・・・・・・・・。」

「ダヴィンチさん。男性サーヴァントさんたちはここに来ないんですよね?」

「うん。一部の増田君を心配しているサーヴァントはやってこようとすることもかもしれない。・・・けれども、ファラオと英雄王、それにアキレウスやヘラクレスたちは今回、私たちの味方だ。安心して、励みたまえ。」

「それを聴いて安心したよ。・・・令呪で、自害させたくないからね・・・。えへへ・・・。」

「な・・・な・・・。あつ・・・?!」

勝手に話を進めるダヴィンチちゃんたちに戦慄しながらも、

何とか抜け出そうとしていると、周りに複数の女性サーヴァントたちが近寄ってきて、

無理やり服を剥いでくる。

来ていたいつもの白い服は脱がされ、生まれたままの姿にされる。

何人もの女性サーヴァントたちに手で、体をまさぐられ、

時に秘部をもてあそばされていく。

「あっ……!! ああ……っ!!」

「かわいい……♡」

「カメラ……カメラ……♡」

「スマホでとればいいですよ♡」

「みんなで撮影会だー♡」

「や、やめっ……!! やめろっ……!!」

手を後ろに引つ張られ、女性サーヴァントに押さえつけられ、

ソファーに磔にされている姿をスマホで撮影する彼女たち。

なぜ皆がそんなものを持っているのか、

そんな疑問もすぐに頭の片隅に追いやられて、

顔が熱くなる。

「そういえばさ、男の人って一日に最高でどれくらいできるの?」

「・・・通常であれば、2，3回が限度。・・・しかし、

今回は性欲を増進する精力剤を用意しているので健康に異常はないです。」

「あー♡おつきくなってるー♡センパイのへんたい♡」

「・・・ふん。こ、こんなことされて悦ぶなんて、

アンタ、とんでもない変態だったのね・・・♡」

「ふふふ・・・♡聖なる夜♡

「・・・違いはしますが、主たる神もきつと見守っていてくれるでしょう・・・♡」

「沖田さんの手、どうですか?♡ね♡ね♡どうですかあ?♡」

「元の私より、魔神さんである私の手のほうが気持ちいだろう?♡

「・・・む♡さらに大きく・・・♡・・・ふふふ・・・♡

「なんだか気分がいいぞ・・・♡増田・・・♡」

「あつ!あつ!!あああああつ!!!」

ブーディカが、ナイチンゲールが、BBが、ジャンヌとそのオルタヤ、

沖田、沖田のアルターエゴ。

そのほか大勢の女性たちに体のいたるところを触られ、

ペニスを手で擦られる。

「あ・・・小さくなってしまいました。」

「まあ、無理もないよね。出したら小さくなっちゃうって、

・・・エ、エツチな本とかでも書かれていたし・・・。」

落ち込んだような声を出すマシユと、

思っていたよりムツツリなのか、

顔を赤くしながらエロいことを言いだす立香。

いつもなら、さらにムラムラするであろうこの状況でも、

気持ち良すぎていつも以上の量が出たからか、

賢者タイムが長かった。

すぐにマイサンが大きくなるということもなく、

静まっている。

「はやくー♡大きくしてよー♡」

「んーと・・・。やっぱり、出してからすぐは無理かも・・・。」

「えー!?だってまだまだこれからだよー!?

増田君には全員相手してもらうんだから、頑張ってもらわないとー!!」

とんでもないことが聞こえたような気もするが、

勃たないものは勃たない。

小さくなるのが自然の摂理である。

「……仕方ありませんね。……失礼します。司令官……」
「おっ……!?!」

ナイチンゲールにソファァで四つん這いにさせられ、
ケツの穴をあらわにさせられる。

後ろで立っている彼女の顔を見た。

——いつもと変わらない、鋼鉄の無表情。

酒気を帯びているからか、この乱交の雰囲気にもまれているからか。
息が荒く、顔が若干赤くなっているように見えた。

「……」
「……」
「……」
「あゝっ?!あゝあゝあゝあゝあゝ!!!」

ぬぷ、という音が鳴ったような感じとともに、
何か、棒みたいなのがケツの穴に入れられていく。

それは、奥のほうまで進むと、ぐにぐにと生物のように動き始める。

「あああああつ!!あああああああああつ!!」

「……前立腺を刺激し、勃起を促します。……今日は、好きなだけ、

射精してください。・・・時間も、精力剤もあります。」

彼女の声が聞こえたような気がしたが、

身に降りかかる快樂でそれどころではなく、

がくがくと足が震える。

体験したことのない気持ちよさに、今にも死んでしまいそうだった。

「ああああつ!!な、なんでえっ!!? イったのになんでええっ!!!」

「前立腺を刺激すると男性の陰茎に血液が集中し、

勃起します。・・・また、このように。」

「ん”お”お”お”お”お”っ!!」

ぐに、ぐに、とケツ穴で彼女の指が弧を描いて曲がる。

中を蹂躪するかのよう、俺の体を貪っていく。

——そして、気が付いたら自分のペニスから液体が漏れているのに気が付いた。

ぐにぐに、ぐにぐに、と。

何度も、何度も。

そして、指が中をかき乱していくたびに、絶頂し続ける。

「・・・あ・・・。」

「……女性のように、射精しない絶頂をすることもできます。

……おや？」

「……………」。

「……………」。

「ナ、ナイチンゲールさん？」

「……………」。

「やりすぎました。」

「」

「ちよ、ちよっと!?レイプ目になっているわよ!?まだ挿入れてもらってないのにー!!」

「<医者!!医者を呼んでー!!」

「……………」。

「<ああ?!ナイチンゲールさんが罪の意識からか、自分の頭に拳銃を……!!」

「<止めて止めてー!!」

「<増田君!?大丈夫?!増田君!？」

「<……………。画像とって、待ち受けにしとこう……………」。

「<(映像を永久保存しなくちゃ)。」

薄れゆく意識の中、慌てるような彼女たちの声と、
いまだに体を感じ続ける快楽を浴び続け、
そつと意識を手放すのだった。

パンツ見せてくれって頼めば、童貞捨てられるらしい(錯乱)　くふあーすとく

齡にして、すでに30日前。

アラサーと呼ばれる男となつてしまい、

更には年齢イコール彼女いない歴というダブルスコア達成をした男。

そう、俺のことである()

「糞がああああああああああああ!!!」

「フオウツ!!(うつせーぞ娑婆増がつ!!)」

「あつ、すみません。」

真夜中だというのに、騒いだからか一緒にベッドで寝ているフオウ君から、お叱りを受けてしまい、少し冷静になる。

ふう、ふう、と乱れた息を整えるために肩で呼吸をする。

この、呪われた装備(童貞)を捨てるためにはどうしたらいいのか。

教会ではずしてもらうのはドラク●では当たり前。

性的な聖女のジャンヌやマルタのあねさ（）

くピキイツ!!?

・・・マルタのお姉さま（震え声）に頼んではずしてもらおうとしたが、なぜか寒気がしたので辞めた。

天草は論外。セミ様と幸せになって爆発しろ。リア充ちね。

（・・・あれ？詰んでね？）

仕事ならともかく、プライベートで知り合いの女性などいるわけもなく、恋愛に発展することも、えっちなこともできることなど到底不可能なのである。悲しいなあ・・・。

その時、とある考えが頭の中に浮かび、電流が走ったような錯覚を覚えた。

（・・・勝ったな（確信））



「はっ。」

俺の言葉に料理をしていたえみやんがこちらに体を向けながら、されど料理をする手は止めずに、呆けた表情を浮かべる。

「マスター。すまないが耳がおかしくなったようだ。

．．．もう一度言ってもらえるだろうか？」

「女性サーヴァントたちに、パンツを見せてもらおうよ．．．」

「なんでさ。」

今度は料理をしていた手を完全に止めて、

両手で頭を抱えてうなるえみやん。

別におかしなことを言っただけでもない。

「はあー、と近くにいたロビンやクーフリーンは思いつきりこれ見よがしにため息をついていた。」

「いや、あのな？大将。それはちよつと、まずいと思うぜ？」

「右に同じだな。やべえよ、それは。」

「ふっ、もちろんちみたちがそういうのは当たり前だとも。」

普通。パンツを見せてくれて言っても、見せれくれるやつなどいないだろう。」

「いや、俺たちが危惧しているのは、別の．．．」

ロビンが何か言ったような気がするが、無視して話を続ける。

「考えてみる．．．俺が女性サーヴァントたちにパンツを見せてくれて頼むだろ？」

「ウン」

「で、俺はゴミを見るような目でにらまるだろう？」

「ソウツスネ」

「で、俺は逃げて、マシユの元まで行くわけだ。」

「エエ・・・（疑問）」

「マシユにパンツを見せてくれてお願いをする。するとどうなると思う？」

「ドウナルンデスカ？」

「”先輩最低です” って言われてまたののしられるわけだ。」

「オマエセイシンジョウタイオカシイヨ・・・（マジレス）」

「で、今度は傷心しきった状態のまま、ダヴィンチちゃんの元まで逃げるわけだ。」

「ハイ（諦め）」

「女性サーヴァントたちを傷つけた責任を取るために、

いったんカルデアを離れて、実家で大人しくしています、と言うんだ。」

「アツ（察し）」

「そして、マツチングアプリか、合コンか、ガールズバーか、風俗に言っただけか、かわいいおにやのこと知り合い・・・。ふっふっふっふ・・・。」

俺の完璧なプランに圧倒され、反論もできない3人に不敵に笑みを浮かべながら、目を見開いて宣言する。

「この戦い・・・我々の勝利だっ!!!」

「なんだか背中から刺されそうなセリフだな（棒）」

不吉なことを言ったクーフリーンは死んだ。

彼の背中からゲイボルクが生えたように突き刺さったからである。

師匠・・・（暗殺の手際が）美しすぎますっ!!（エリナ風）

とジョジョ立ちして、計画実行のイメージトレーニングをするのだった。



「時は満ちた。——いざ行かん。」

この日のために、準備を重ねてきた。

パンツを見せてくれないか頼む練習に一日の半分を費やしたのだ。

その結果もあって、どのように断られてもフリーズせず、

すぐに対応できるようになったのだ。

あとはうまく断られて、今回の件の責任を取ると言っ

て、日本に帰って、かわいいおにやのこと出会って、俺の完全勝利である。

廊下を歩いていると、さっそく誰かが前からやってくるのが見えた。

「あつ、先輩。」

「.....」

——いきなりマシユが来ちやったよ.....

どうしよう.....

（待て。どちらにせよ、マシユに罵倒される予定なら、

今罵倒されてもいいのでは？（超理論）

（異議なし。）

（異議なし。）

（後輩最高です。）

（立香さんのパンツト越しのパンツ見たい。）

（異端者がいるぞ。処刑せよ。）

（なっ、何をするだぁー！！）

頭の中で、全会一致でとりあえず、マシユにお願いして、

パンツを見せてもらおうようにお願いすることにした。

すまないマシユ.....。だらしのない先輩で.....。

でも、辞める気はないんだ！（開き直り）

すううう、と息を吸って、そして彼女に頼む。

「——マシユ!!お前のパンツが見たいっ!!見せてくれっ!!」
「はい、わかりました。ではこちらに。」

「・・・あれ?」

顔を若干赤らめながらも、彼女は即答すると同時に、
俺の右手をつかんで、ドナドナと連れ去っていく。

(・・・え?)

一体どういうことなの・・・(困惑)

この後、もっと大変な事態が俺を待っているとは、
思いもよらないのであった・・・。

つづく?!

パンツ見せてくれて頼めば、童貞捨てられるらしい(錯乱) ~せかんど~

「

夢だ。俺は夢を見ているに違いない。

そうだ、そうだとすると頭の中で理性を働かせて冷静になろうとするも、先ほどまでのことが忘れられない。

『せ、先輩……。あの……。どうですか……。?』

——いつも着ている服のスカートを口で啜えてたくし上げ、

顔を羞恥で真っ赤に染めながらぶるぶると震え、

恥ずかしそうに聞いてくるマシユの姿。

男が求めているロマンが彼女にはすべて詰まっていた。

いかん、想像しただけでも……。

『ああああああああああああああつ!!

ありがとうございまあああああつす!!!』

まあ、それは大したことじゃない（現実逃避）

そういうえばパンツを見せてもらおうという、俺の考えを聴いていて、背中から突然ゲイボルクが生えて死んでいたランサーが、生き返ったと思ったら、起き攻めでどこから飛来した二本のゲイボルクに心臓を貫かれてまた死んでいた。

まあ、あれでも大英雄だから平気だろう。

ガチればギルガメッシュとも半日以上戦えるぐらい強いし。

自室の机に突っ伏してうー、とうなる。

だって、

だって、

「———本当に見せてくれるとは思わなかったから？」

「そうそう。」

「ふーん。——ちなみに、マシユのパンツは何だった？」

「黒タイツ越しで分かりにくかったけど、ありや、水色と白のストライプ柄だな……。」

後輩、最高です（力説）

「……ふーん。」

「……んんん？」

あれ？自室に戻ってきたというのに、俺は誰としゃべっているのだろうか？

顔を挙げた瞬間、いつも見慣れた整っている顔立ちが目の前にあるのが見えた。

「うおっ」

驚きのあまり後ろにのけぞりそうになるも、

かろうじてこらえ、倒れずに済んだ。

「あー。ひどいなー。女の子の顔を見て、

後ろに飛びのくなんてさ。」

「な、なんでここにいるんだ？」

にしし、と笑いながら俺のほっぺたを右手の人差し指でつん、つん、

と突っついてくる立香にそう聞くと、ドアのほうを左手で指し示しながら言うてる。

「ノックしても返事がなかったからさー。ちよつと様子を見ようとしたら、

鍵がかかってなくてね。」

「……あ。」

いつもちゃんとカードキーをかざして鍵をかけてきたけど、

今日はマシユとの一件があつて、すっかり頭から飛んでいた。

まあ、だからといって勝手に入るのもデリカシーがないんじゃないだろうか。

俺の考えが顔に出ていたのか、今度は立香に両手で頬を伸ばされる。

「こ、こらっ!!やめろっ!!」

「あははははっ!!おもしろーい!!」

で、そんなやり取りをすること数分。

ようやく落ち着いた部屋の中、俺は改めて立香のほうに向きなおる。

——の、前に。

「・・・あの、立香?」

「ん?何?」

なんで俺と立香はベッドで腰かけながら隣り合って座っているんでしょうかね（白目）

こいつつ・・・!!普段は女子力ならぬ、女死力のくせに、

なんでこんないいにおいがしやがるのだろうか。

普通にドキドキして、喉が渴くのは卑怯だ。

距離感が近くて、落ち着かずソワソワする。

「なに?もしかして、興奮してるの?ww」

「は、はー!!?するわけねーだろ!!お前に!!」

嘘です。めっちゃやっています。こうでもふるまっていないと、今にも勃起どころか射精しそうですねです。

小学生のころ、女子の水着替えを生で見えてしまい、

ちんち●が痛いくらい勃起したあの時並みの興奮度である。

くそう。くそう。

マシユならともかく、立香にこんなドキドキさせられるとは……。

「———ところでさ。」

「……ん？」

頭の中であーだこーだ考えていると、

隣でにこにここと笑っていた立香が急に切り出してきた。

気のせいだろうか。それまでとはちよつと違う声色で。

「———実は聞きたいことがあつてさ。」

「———なん」

だ、と言いかけたところ、立香にベッドに押し倒される。

そして、彼女が俺の耳元でささやいた言葉に、

今度は別の意味で心臓がどきどきと鳴るのだった。

「——マシユにパンツを見せてもらったんだってね？」

「これが本題か畜生、と神様を呪った。」

パンツ見せてくれって頼めば、童貞捨てられるらしい(錯乱)　くさーどく

俺の前には、顔をほんのり紅く染め上げた、笑顔が似合う美少女。

片側にくくられたサイドテールは解かれ、肩のあたりより少し先まで伸びている髪が、ふわりと鼻先をかすめる。

「……………」
「……………」

時計が刻むちくたく、という音と、俺たちの息遣いだけが部屋で響く。

俺は一体何をされた？

↓あの、立香に押し倒された

↓うっそだろwwお前ww

↓いえ、ほんとです

↓うせやろ？

そんな阿呆な脳内会議をしている俺の前まで、
彼女が膝立ちてよつてきて、

スカートをそつと両手でまくり上げた。

「……ねえ。」

怒っているのか、悲しんでいるのか、

色んなものがないまぜになった表情のまま、

彼女はにっこりと笑う。

「……いけないこと、しよ？」

そういう彼女に向かつて断ることなどできず。

俺はこくこくと首を縦に激しく振った。



「……………」

「ふふふ…大丈夫だって…♡好きなだけ顔をうずめていいからね♡」
すーはー、と深く呼吸をすると甘いにおいが鼻の中を通り抜ける。

ベッドにうつ伏せに寝つ転がっている彼女のスカートの中に頭を突っ込み、
あろうことか、その大きなお尻に顔を押し付けていた。

中は暗かったが、パンスト越しに包まれたパンツの色が黒色であることがろうじて
わかった。

むっちりとしていて、いつまでもほおずりしたくなる太もも。尻。

魔性とはこういうことか——。

女に溺れる男の気持ちが変わった。

けれども——。

「あん♡がつつきすぎいい♡」

「むう!?!」

彼女がいきなりお尻を突き上げ、四つん這いになる。

彼女のお尻に顔事押し上げられ、離れないようにしっかりとしがみつく。

「あははは♡もう♡必死すぎだよぉ♡．．．そんなに私の体、好きなの？♡」

このやろう．．．と思いつつも、

彼女の体から離れることができない。

それどころが、落ち着いてきてしまっているのに気が付き、

必死に抵抗を試みる。

（．．．まてまてまてまて。なんだ、これ？

なんで俺はこんなことを．．．。

あ．．．すごい温かい．．．。）

そんな理性もあつという間になくなり、

彼女に再び夢中になる。

駄目だ、もう、我慢できない。

がぼりとスカートの中から顔を出して、

彼女のお尻に自分の固くなっているモノをかくかくと腰を振って押し当てる。

「立香．．．!!立香．．．!!」

「なあに？♡」

わかっているはずなのに。

俺が今何をしたいか、察しているくせに、意地わるく彼女は聞いてくる。

「頼む．．．!!させてくれ．．．!!頼む．．．!!」

腰を振りながらそういう俺の姿を見て、

ふふふ、と笑う立香。

「．．．いいよ♡私が一生君のおちんちんのお世話したげる♡

でも、その代わり．．．♡君は一生私の物♡

私は一生君の物♡．．．♡それでいいなら♡」

「ああー!!!なんでもいい!!!」

彼女が何か言ったようだが、していいと言っただけはわかった。

スカートをまくりあげ、パンストと、パンツを膝までずりおろさせ、

右手でペニスを持ちながら、亀頭を彼女の秘部に押し当てる。

「きゅうううううっ♡♡」

「おおお．．．!!やばい．．．!!」

一気に挿入すると、彼女がびくん、と体を跳ねさせ、

先ほどまでの余裕などなくなったかのように、

じたばたともがく。

「きゃひっ♡ひいいいいっ♡あああああっ♡」

お構いなく、腰を振り続ける。

逃げられないように、上から体重をかけてのしかかり、奥のほうまでペニスで突き上げる。

そのたびに、彼女は獣のような声をあげながら絶叫し、悦び続ける。

「なにこれえっ♡アツ♡メスになりゆっ♡メスになっちゃうううう♡」

きゆうきゆうとあそこを締め上げられて、

うぐ、と声を漏らす。

自分でオナニーするのはわけが違う。

「はあっ!!はあっ!!おらっ!!イけっ!!イけっ!!

淫乱っ!!誘惑しやがって!!」

「らめっ♡子宮っ♡♡子宮が堕ちてりゆっ♡♡おちんちんにっ♡♡

負けちゃってるのおっ♡♡」

所在気なく動く彼女の両手の手首を上から押さえつけ、

今度こそ完全に動けないように拘束する。

腰を振るのが止められない。

頭が真っ白になっていく。

「あつ♡♡あつ♡♡キスつ♡キスしてえつ♡♡優しいレイプしてえつ♡♡♡」
そう叫ぶ彼女の唇を奪い、今度は口の自由を奪う。

唇を重ね合わせた瞬間、彼女が口の中に舌を入れて絡めてきた。
ちゆくちゆく、と恋人同士がするような優しく、

そして淫乱な口づけを交わす。

「おおお・・・!!出すぞ・・・!!」

「だしてえっ♡♡熱いのっ♡♡いっぱいだしてえっっ♡♡♡」

—— 何かの糸が切れるように、

体の奥からせりあがってくるような衝動に身を任せると、

彼女の中に射精していた。

精巢から絶え間なく出し続け、

彼女に搾り取られていく。

彼女の頭にそつと手を置き、撫でながら、

また上から体重を乗せてギツ、ギツ、とベッドをきしませる。

結局付き合うことになった。

1日中やり続け、やればやるほど性欲が湧き上がってくるため、またそれを抑えるために、というループになりかけたが、

最後は立香が失神しながら盛大にイキ狂い、

ようやく終わりをつけた。

で、そうして付き合うことになった関係をどうするか。

彼女が任せて、というので食堂にサーヴァントや関係者を集めたところ、

見事に爆弾を落としてくれやがったのである。

「ねね♡この首わいいでしょー♡．．．いやー、なんていうか、いやー♡♡

えへへ．．．♡」

目にハイライトのない女性サーヴァントたちのほうに目を向けないよう、顔を伏せたまま回れ右をして、全力疾走する。

「————令呪をもって命ずる!!!俺たち二人の関係を祝福しろおおおおお!!!」

——結局つかまり、彼女たち全員の愚痴や、もろもろの内情を延々と聞く羽目になり、解放されたのはその一週間後だった。ちなみに、酒を吞まされて記憶がない場面もあつたが、何もなかったと信じたい。

たすけて

おわり

「……え？今回私、当て馬……？」

マシユは次回のメインだから今度こそおわり